

人間の福祉 第38号 (2024) 11～54

〈退職記念論文〉

研究の回顧と年次別研究業績一覧※

溝 口 元※※

1. 研究の回顧

私のこれまでの研究の歩みは、領域的には大きく3つに分けることができる。1) 発生生物学, 2) 生命科学史・生命科学論, 3) 福祉テクノロジー・生命倫理関係, である。とはいえ、時期的な区分ができるものではなく、それぞれ絡み合いながら今日に至っている。

1) 発生生物学

大学院(制度上、5年制博士課程第1期生)時代、発生生物学の実験的研究に従事しながら研究者としての知識や技術を身につけた。恩師は卒業論文から大学院修了まで東京大学理学部生物学科ご出身の安増郁夫(1929-1999)先生(1977年:日本動物学会賞受賞, 1987-1990年:日本発生生物学会会長)であった。大学3年後期、4年時の卒業研究でどの研究室に入るかという希望提出が求められ、安増先生主宰の発生生物学研究室を選んだ。

元来、海が好きで磯の香と潮風、岩にぶつかる白波の音を聞きながら臨海実験所の実験台や実験室で顕微鏡をのぞいているだけで十分と2年時の専門必修科目「臨海実習」の際に感じていたこと。白上謙一(1913-1974)、林雄二郎(1920-1981)、岡田節人(1927-2017)ら諸先生の発生学の入門書、解説書に馴染んでいたこと。さらにこれらの著書の中でも扱われているアメリカのウィルソン(H.V.Wilson, 1863-1939)が1907年に行った海綿をバラバラにしても細胞が再集合し元の形態に再構築するという形態形成現象が興味深かったことなどによる。

とはいえ、大学院在学時、分野としては「発生生化学」ないし「発生生理化学」と呼ばれ海産無脊椎動物胚を材料に形態形成等の発生現象を裏付ける物質的基盤を明らかにすることが求められていた。筆者の理学博士学位論文はそれに沿った「ウニ胚の原腸形成とコラーゲン合成」である。ウニ胚では孵化以降、内胚葉側でプロリンからヒドロキシプロリンへの転換(水酸化)

※ Research Review and List of Annual Achievements

※※ Hazime MIZOGUCHI 社会福祉学部社会福祉学科教授

キーワード: 研究回顧, 業績一覧, 発生生物学, 生命科学史, 福祉テクノロジー

を指標としたコラーゲン合成が高まりプルテウス幼生になるまでそれが続く。

逆にこれが起きないと原腸（消化管）という生存に不可欠な器官の形成が不全になる。実際、阻害効果が知られている物質を使ってコラーゲン合成を抑制すると原腸形成は阻害されるなど形態上の異常を来し、コラーゲン合成も低下しているというものであった。主な研究成果報告の場は、日本動物学会（1878年に前身が設立）と日本発生生物学会（1968年設立）であり、そこで少なくない研究者と知己を得ることができた。

ウニ胚を研究材料にした発生生化学的研究の成果は、1982年から1983年にかけてアメリカ、オランダ、ドイツ、日本から発行された国際誌に理系院生の慣例どおり、恩師との共著で執筆した英文論文を投稿し採択され、それが学位論文にもつながった。1983年3月、学位取得の翌月から立正大学短期大学部に専任講師（教養科目担当）として着任したが、母校や他の研究機関で実験的研究の持続が望めば可能ではあった。

しかし、20世紀の末から特異タンパク質の変動から遺伝子そのもののへアプローチに研究者の興味もたれるようになっていた。遺伝子を扱うとなると当時の私には、それに必要な知識や経験、設備や時間、研究費等から考えてもかなり厳しいことであった。

生物の発生現象を遺伝子の活性化・情報発現と関連させて解明していくことが大変魅力的であることは理解していたが、実際に取り組むことは断念し、シンプルであるにも関わらずこれまで知られていなかった胚の原腸を細胞レベルから研究することにした。1999年、ウニ胚を使い原腸を構成する細胞の数を発生段階ごとに計数し単名で日本動物学会の国際誌に掲載した。

この間、もっとも単純な構造を持つ多細胞動物である淡水海綿の発生をお茶の水女子大学の渡辺洋子先生から手ほどきを受け、2つほど論文としてまとめさせて頂き、アメリカ、ドイツから出版されたモノグラフに掲載することができた。実験系の研究では、さしあたり思いつくテーマは世界の誰かが取り組んでいるといって過言でない状況であることは大学院生時代から実感していた。結局、私の取り組んだテーマであるウニ胚形態形成期におけるコラーゲンの挙動については、1993年になってギリシャの研究者が見事と思える完成度の高い

George Karakiulakis *et al.* 1993 Expression of type IV collagen-degrading activity during early embryonal development in the sea urchin and the arresting effects of collagen synthesis inhibitors on embryogenesis

と題する論文が国際誌 *Journal of Cellular Biochemistry* の第52巻第1号に発表された。有難いことにこれには私の博士論文の基になった1983年の論文

Hazime Mizoguchi and Ikuo Yasumasu, 1983 Inhibition of archenteron formation by the inhibitors of prolylhydroxylase in sea urchin embryos, *Cell Differentiation* 12巻

が引用され、報われた気がしたと同時に自身の至らなさも思い知らされた。

文科系学生に講義を行うことが生業とはいえ、実験室科学にまったく魅力を感じなくなったわけでもなかった。大学院時代、同じ研究室の先輩で神奈川大学理学部の日野晶也先生からの依頼で非常勤講師として出講することになり、昼休みや授業終了後に日野研究室に属する卒論

生、大学院生の実験発生学的研究の相談や助言を行う機会を得た。成果報告にそれほど時間的に追われることはなく学生のペースで、彼女ら数名と当時、学界で関心が高まっていたアポトーシス現象をウニ胚を使って実験的研究に取り組むことができた。そして、1999年にケンブリッジ大学出版部が発行している国際専門誌 *Zygote*, 第8巻に

Hazime Mizoguchi, Dai Kudo, Yumi Shimizu, Keiko Hirota, Shinobu Kawai and Akiya Hino

1999 Distribution of apoptosis-like cells in sea urchin early embryogenesis

と題して載せることができた。

この研究の完成形といえるスマートな報告も西欧の研究者によって行われ2002年に、

Maria Roccheri, *et.al.* 2002 Physiological and induced apoptosis in sea urchin larvae undergoing metamorphosis

と題して国際誌 *The International Journal of Developmental Biology* 46巻6号に掲載された。

我々の報告が引用されていたのは何よりであった。

2) 生命科学史・生命科学論

私がつと量的に多く発表してきたのが、この生命科学史・生命科学論の領域で、なかでもその歴史・方法に関係したものである。学部3年時頃から白上謙一『生物学の方法 発生細胞学とはなにか』(1972)や村上陽一郎『近代科学を超えて』(1974)の著作と出会い影響を受けたり、モノーの『偶然と必然 現代生物学の思想的な問いかけ』(1972)、ワトソンの『2重らせん DNAの構造を発見した科学者の記録』(1968)をめぐって先輩から議論に誘われたことから科学史・科学方法論にも強い興味を持っていた。なかでも白上先生が記した生物学方法論への関心を機に、背景となる科学史の基礎も知っておきたいという気になった。

大学院博士前期1年時、学部の開講されていた菊池俊彦(1926-2020)元日本科学史学会会長の「科学史」の講義を正規の受講でなく聞かせて頂こうと思い挨拶に行った。幸い快諾され「ちょうど良いから来なさい」と言われ、同行した大学近くの喫茶店になんと筑波常治(1930-2012)先生がいらした。お二人は同じ時間帯に非常勤講師として科学史系科目を講義されており、毎週、授業開始前にコーヒーを飲みながら雑談をされ、教室に向かわれていた。菊池先生からは科学史学界のお話を聞かせて頂いた。

また、筑波先生のご紹介で当時、東京工業大学の八杉龍一(1911-1997)先生のところで行われていた日本科学学会生物学史分科会月例会や同分科会が編集発行している「生物学史研究」を知ることができた。そして、月例会にも顔をだすようになり、参加していた方々と今日まで続く知己を得ることができた。さらに、筑波先生の御配慮で、東京大学駒場キャンパスの科学史・科学哲学関係のいくつかの授業も拝聴できるようにして下さった。実際に組んでいた発生学の学説史から論文の執筆を始め、大学教員として勤務するようになった1983年からは西欧近代科学技術に対する通史的興味を自分なりに整理して、単著で『科学の歴史－近代科学の成立と展開』(1985)を刊行した。

東大駒場での受講させて頂いた授業の一つが立正大学教養部の中村禎里（1932-2014）先生が担当されていた「科学史第二」と題する遺伝学史がテーマの科目で、メンデルの遺伝の法則の再発見過程を原著論文から追究していく仕方が大変興味深かったし、大いに参考になった。その後、中村先生からは『遺伝学の歩みと現代生物学』（1986）や放送大学テキスト『新訂 生物学の歴史』（2001）で分担執筆、共同執筆をさせて頂く機会を得た。

他方、占領期から今日に至る日本の戦後科学技術の歩みにも関心を抱いた。福祉とも関係する「公衆衛生政策－引揚検疫と DDT」（1995、英語版2001）や「占領期における人口政策と受胎調節」（1995、英語版2001）、「ペニシリンと製薬工業の戦後復興」（1995、英語版2005）などをまとめた。これらは、科学史家の中山茂（1928-2014）、後藤邦夫（1930-2019）、吉岡斉（1953-2018）先生らを中心とする戦後日本の科学技術を通史的に捉えていく研究グループの一員としての活動成果でもあった。分担執筆の機会が与えられた『通史 日本の科学技術』（全6巻、1995-1999）は、1995年に毎日新聞社出版文化賞特別賞に輝いた。

1996年に日本学術振興会派遣研究員に選出され渡欧。イタリア・ナポリに所在するナポリ臨海実験所アーカイブスで資料調査を研究所アーキビストの助言を受けながら行った。日本人研究者が訪れた欧米の研究機関やそこでの知識・技術の習得の様子、人脈の構築などをテーマとした。その成果を『ナポリ臨海実験所』（1999）や『ナポリの玉手箱』（2022）等の単行書で分担執筆を行い、Japanese Biologists at the Naples Zoological Station, 1887-1956 (1998), Japanese Biologists at the Marine Biological Laboratory, Woods Hole (2007) と題し国際誌に論文として発表した。これらの内、『ナポリ臨海実験所』（1999）は品切れになり古書店やインターネット販売では定価以上の売値が付けられ驚いたものである。

こうしてアーカイブス資料の調査に興味を持ち、成茂動物科学財団から得た渡航費・滞在費を利用し訪問した米国のウッズホール臨海実験所図書室（2000）やジョンズ・ホプキンス大学アイゼンハワー図書館アーカイブス、国内では国立遺伝学研究所ゴールドシュミット文庫や早稲田大学中央図書館特別資料室などの資料を使って研究を行うことができた。

さらに、スミソニアン自然史博物館保存庫、国立台湾大学でそれぞれ実施した両生・爬虫類、ほ乳類の標本調査も2014年に「スミソニアン博物館学芸員スタイネガーによる日本産両生類調査とその現存液浸標本（付）台北帝国大学青木文一郎採集ネズミ科標本」と題して論文にまとめた。これは幸いなことに動物分類学会の学会誌掲載論文に引用された。2010年代に入ると、日本動物学会男女共同参画・女性研究者懇談会の活動に呼応して「日本の女性動物学者－歴史的素描」をこの会の10周年記念誌に寄せた（2010）。2020年代に入ってから取り組んだギフチョウ（2021）やクニマス（2023）をめぐっての歴史的研究は社会的に話題になった動物を生命科学史的背景から明らかにしようとするものであった。

元来、文系学生への自然科学系一般教育科目を担当することが教員としての専らの業務である。彼、彼女らへの自然科学への興味の喚起、科学知識の理解、科学的情報の社会への伝播、理解、浸透などを話題とする教材研究も行った。それにより学生の科学リテラシーの向上が期

待できるのではないかと考えた。

題材は血液型性格判断や男女の産み分け、若返り法などの擬似科学的知識やノーベル賞にまつわる学界・研究室内での人間関係等を題材にした。1980年代後半から1990年にかけて科学誌「科学朝日」等に連載として断続的に掲載され、『ノーベル賞の光と影 (増補版)』(1987),『スキヤングの科学史』(1989),『サイエンスを再演する パート2』(1992),『科学史の事件簿』(1995)などの単行書に収められた。これらについては科学論的、科学社会学的に分析していく契機となり、今日いう科学コミュニケーションの場面にも利用できた。

ABO式血液型による性格判断(「血液型気質相関説」)の歴史をまとめた論文「古川竹二と血液型気質相関説—学説の登場とその社会的受容を中心として—」(1986)は、日本大学の大村政男(1925-2015)先生始め少くない心理学者からも興味を持って頂き、論考に引用して頂いた。

ここから心理学界に人脈が拡がり大部な『通史 日本の心理学』(1997)の出版につながった。また、2000年に訪れたジョーンズ・ホプキンス大学医学史研究所の所蔵資料(William Gant Collection)を閲覧させて頂き、日米におけるパブロフ学説の導入過程の歴史的研究に取り組み、2005年にReception of Pavlov's theory in Japanを日本心理学会の国際誌 *Japanese Psychological Research*, 47巻2号に発表することができた。

さらに、アメリカにおける心理学史の研究拠点であるアクロン大学心理学アーカイブスに心理学者と科学研究費助成金を利用して訪れる機会を得た。心理学者で心理学史に強い関心をお持ちであった大山正(1928-2019)、西川泰夫、辻敬一郎先生、新進のサトウタツヤ(佐藤達哉)、高砂美樹、鈴木朋子氏らとの知己が得られ、国際心理学会でも度々、共同発表を行うことができたのはなによりであった。

3) 福祉テクノロジー・生命倫理

学問的バックボーンともいべき発生物学や学会活動を続けてきた生命科学史・生命科学論の領域には恩師、ないし大変お世話になった方々の固有名詞を挙げ謝意を表することができるのだが、福祉関係にはそうした人材は不在であった。とはいえ、社会福祉学科の3年、4年生への演習科目の担当や卒業論文の指導が要請されているため、一定以上の福祉関係の事情に通じていることが学生指導に不可欠であることは明らかであった。

そこで、自身の福祉関係の基礎知識を獲得すべく、一念奮起して精神保健福祉士、社会福祉士、介護福祉士の順で通信教育および夏季休暇中のスクーリング、合計10週に及んだ実習を体験し国家試験の受験資格を取得した。これらが極めて有意義で幸い、5年間で3種類の福祉系国家資格を得て、学生教育にも反映させることができた。さらに、20年以上の現場経験豊富な社会人大学院生が語る情報や介護認定審査会委員、「立正たちばなホーム」入所検討会での経験、学科の福祉士国家試験対策室を任されたことなども有用であった。これらから学部、大学院での福祉系科目、なかでも福祉テクノロジー、生命倫理等を担当することができた。

「福祉テクノロジー」という語は、所属の社会福祉学科で担当する「社会デザインコース」に

属する3年生の専門演習が「福祉テクノロジー」と名づけられたことからである。残存能力を考慮したアクセシビリティ、ユニバーサルデザイン化の問題を含めた支援技術、人間－機械系などに取り組むべき課題と考えるようになった。

しかし、そのルーツは短期大学部時代の1990年代、海外研修の引率で訪れたロサンゼルス福祉施設の駐車場で自動車の中に車いすを利用者が自身で収納する様子を見たことであった。ある種の驚きと感動を覚え科学技術と福祉との接点に関心を抱くようになったのである。そして、福祉機器・用具の開発思想の一つである「テクノエイド論」に財団法人テクノエイド協会（1987年設立認可）の事業ともども注目するようになった。時期としては、短期大学部が社会福祉学部へ改組された頃であり、1997年3月に発行された記念すべき学部紀要「人間の福祉」創刊号に「福祉機器の開発とテクノエイド論」（1997）をまとめ寄稿した。さらに、産業界における研究開発の動向にも対象を拡げ、「福祉機器の開発と展開」（2000）、「感性工学の誕生と展開」（2011）、「IT 機器による障害者支援」（2011）などの論文を執筆・掲載した。

3、4年生を通じた社会デザインコースの教育カリキュラムは予定定員程度の数の学生が選択をし、ここから卒業論文指導の下、執筆された2編が2年続けて佳作（現在の優秀賞）を受賞するに至った。受賞後、学術論文の形式を助言し、共著で学内学会誌「立正社会福祉研究」に以下の題名で掲載することができた。

- ・山口小春、溝口元、2019 JR 武蔵野線における優先席、立正社会福祉研究、通巻34号
- ・川崎喬瑛、溝口元、2020 多機能トイレの利用実態とその課題、立正社会福祉研究、通巻第36号

他方、2004年に埼玉県各地で開催された「全国障害者スポーツ大会（彩の国まごころ大会）」を機に研究所から助成金も得られたことから研究プロジェクト「障がい者スポーツに関する基礎研究」を立ち上げ、その成果報告を「立正大学社会福祉研究所年報」第7号（2005）に発表した。当時、障がい者スポーツに関する研究自体がそれほど多いものではなかった。

ここからさらに、1964年のパラリンピック東京大会に傷痍軍人が参加していたことに関心を抱き、歴史的研究と関連させた傷痍軍人のリハビリテーション、義肢装具開発、障がい者福祉の制度化等の研究にも取り組み、以下の論文にまとめ「立正大学社会福祉研究所年報」、18、19、25号に載せることができた。

- ・「傷痍軍人」考—大島渚監督「忘れられた皇軍」を通して—（2016）
- ・傷痍軍人とリハビリテーション—温泉療法ならびに職業補導を中心に—（2017）
- ・『闘ふ義手』（1941）、『義肢に血が通ふまで』（1943）の情景—傷痍軍人に対するケアからパラリンピック出場へ至る途—（2023）。

学外誌では、2023年5月、障がい者スポーツ選手（パラアスリート）の登場とそれを支えるテクノロジー、「イル・サジアトーレ」、50号がある。国際的には地域紛争を含めた戦争は断続的に起こっている。このことは「傷痍軍人」を生み続けていることを意味し、諸外国では実際に軍とパラリンピック委員会との連携が指摘されている。懸念されるところであろう。

各地で養蜂技術の指導を行っている「トウヨウミツバチ協会」と養蜂とくに採蜜活動の知的障がい者への効果を九州の知的障がい者入所施設、就労支援施設で実地調査し2021年に報告することができた。アメリカでは退役軍人がPTSD 対応として養蜂に取り組んでいることが報告されている。これについては今後の課題としたい。

1978年、世界的に話題になった英国での試験管ベビーの誕生以降、出生前検診を含め生殖医療技術にも興味を寄せた。そして、1990年代に入ると、埼玉医科大学で「性同一性障害」と判定された方に対する日本初の性別再判定手術（性転換手術）が行われたことから、この問題に強い関心を抱くようになった。そして、性同一性障害に関する歴史的倫理的問題を検討し、Bioethical aspects of gender identity disorder in Japan と題して 4 th World Congress of Bioethics (2001) において報告し、論文 (2002) にまとめた。これらを含め、単著で『生命倫理と福祉社会』(2005) を刊行することができた。

生命倫理の領域では、さらに動物福祉、生命観を含めた論考として「[「生類憐みの令」の動物観 (上) (下)]」(2019-2020) を専門誌に掲載した。iPS 細胞や再生医療の生命倫理的問題を日蓮宗ビハラー研究会「いのちの講座」でも話題提供をさせて頂いた。

また、企業の社会貢献、なかでもフィランソロピーに関心をもち、国の科学政策と民間非営利機関の研究助成との比較検討を歴史的観点から行った。20世紀初頭に設立されたアメリカのカーネギー財団やロックフェラー財団、日本の斉藤報恩会等の活動を分析し、これらの公衆衛生や心理学への助成の実態の一部を「第22回国際科学史・技術史会議」(2005) で発表した。さらに、この中から野口英世を取り上げ近隣の中高生を対象に「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI」において「野口英世の人生と医科学と日米社会」を実施した (2009)。

雑駁ながらこれまでの私の研究の歩みを整理すると以上ようになる。以下に年次別の業績一覧を掲げさせて頂きたい。

2. 年次別研究業績一覧

▼2024 (令和 6) 年

著書 (編著)

- ・『新たな福祉社会の創生を目指してー現場・理解・歴史的視座からの発信』, 丸善プラネット (全450頁), 2024年 2 月

解説記事 (単著)

- ・研究の回顧と年次別研究業績一覧, 「人間の福祉」, 38号, 11-54頁, 2024年 3 月

▼2023（令和5）年

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・同じ年からみた吉岡斉，『吉岡斉を語る / 吉岡斉が語る』（中山正敏・綾部広則編），花書院（全322頁），170-174頁，2023年5月

論文（単著）

- ・『闘ふ義手』（1941），『義肢に血が通ふまで』（1943）の情景—傷痕軍人に対するケアからパラリンピック出場への途—，「立正大学社会福祉研究所年報」，第25号，3-20頁，2023年9月
- ・障がい者スポーツ選手（パラアスリート）の登場とそれを支えるテクノロジー，「イル・サジアトーレ」，50号，14-22頁，2023年5月
- ・「奇跡の魚」クニマスの再発見をめぐる科学史・科学論，「東海の科学史」，15号，16-29頁，2023年4月

送辞（単著）

- ・清水海隆先生をおくる，「人間の福祉」，37号，13-15頁，2023年3月

学会等発表（単名）

- ・早稲田大学特別資料室蔵「桑木彥雄関係資料」及び「小倉金之助伝記資料」，シンポジウム：大学アーカイブス・デジタルアーカイブス所蔵資料と科学史研究，日本科学史学会第70回年会・総会（東京），要旨：「研究発表講演要旨集」，56頁，2023年5月

▼2022（令和4）年

著書（編著書，担当部分単著）

- ・第一章 ダーウィン進化論の申し子，ナポリ臨海実験所（11-52頁），あとがき（202-205頁）『ナポリの玉手箱 海の生きものと魅せられた人々』（木原章・西川輝昭・溝口元・横田幸雄編著），丸善プラネット（全229頁），2022年7月

論文（単著）

- ・宗教系大学はその歴史をいかに記述してきたか：大学史を基にした比較検討，「立正大学史紀要」，6号，3-35頁，2022年3月
- ・立正大学大学院社会福祉学研究科設立20年にみる課題と展望，「人間の福祉」，36号，45-67頁，2022年3月

解説記事（単著）

- ・「持続可能な発展のための国際基礎科学年」（IYBSSD2022）について，「科学史通信」，451号，6頁，2022年10月

学会等発表（単名）

- ・ポストヘッケリズム期における日米動物学者のナポリ詣，日本動物学会第93回早稲田大会，要旨：「プログラム集」，37頁，2022年9月

▼2021 (令和3) 年

著書 (項目執筆: 担当部分単著)

- ・ 科学論文 (362-363頁), 科学雑誌 (372-373頁), 生体認証 (430-431頁) 『科学史事典』 (日本科学史学会編), 丸善出版 (全726頁), 2021年5月

論文 (単著)

- ・ 社会に流布する「進化論」, 「科学史研究」, 299号, 262-271頁, 2021年10月
- ・ 京城・台北帝国大学に在籍した日本人動物学者の活動と引揚げ後, 「サジアトーレ」, 48号, 91-103頁, 2021年5月
- ・ 名和靖のギフチョウ「発見」をめぐる科学史, 「東海の科学史」, 第14号, 19-32頁, 2021年4月

論文 (共著)

- ・ 養蜂にみる新たな農福連携・障がい者就労支援, 共著者: 溝口元・高安さやか・高安和夫, 「立正社会福祉研究」, 23巻 (通巻37号), 113-125頁, 2021年11月

解説記事 (単著)

- ・ 蜂—新たな農福連携・障がい者支援への具体策, 『ミツバチストーリーズ2 「やさしい養蜂」が, 障害者と地域の可能性を広げる 農福連携養蜂事例集』, 一般社団法人トウヨウミツバチ協会, 68-70頁, 2021年12月
- ・ 「津久井やまゆり園」, 「新型出生前診断」をどのようにとらえたか—行田市障がい者ネットワーク職員及び立正大学学生への障がい者人権理解調査から— 『障がい者の暮らし&人権のことがわかるテキストブック』 行田市障がい者ネットワークハッピー行田, 24-27頁, 2021年3月

報告 (単著)

- ・ 「進化論誤用・悪用・濫用」問題 本小特集の趣旨, 「科学史研究」, 299号, 245-246頁, 2021年10月
- ・ シンポジウムを受けて, 『障がい者にやさしい養蜂シンポジウム開催報告書』, 一般社団法人トウヨウミツバチ協会, 36-37頁, 2021年3月

書評 (単著)

- ・ 矢島道子 『地質学者ナウマン伝—フォサマグナに挑んだお雇い外国人』, 朝日新聞出版, 「科学史研究」, 296号, 400-403頁, 2021年1月

学会等発表 (単名)

- ・ 現存史資料からみた動物学者箕作佳吉, 五島清太郎の基礎・実用研究, 社会貢献, 日本動物学会第92回大会オンライン米子大会, 要旨: 「オンライン」, P-20, 2021年9月
- ・ シンポジウム「進化論誤用・悪用・濫用」問題, コーディネーター, 社会に流布する「進化論」, 日本科学史学会第68回年会 (神戸大学&オンライン), 要旨: 「講演要旨集」, 106頁, 2021年5月

▼2020（令和2）年

論文（単著）

- ・ A Historical Sketch of the National Institute of Genetics in Japan, *The Risho International Journal of Academic Research in Culture and Society* 3, 119-133, 2020年3月

論文（共著）

- ・ 多機能トイレの利用実態とその課題，共著者：川崎喬瑛・溝口元，「立正社会福祉研究」，22巻（通巻36号），33-42頁，2020年11月
- ・ Promoting the sharing of ideas via “Idea Papers”，*Ecological Research*, 35(4), 575-578, 連名者：Takashi Miki, Masahiro Nakamura, Kazuki Matsui, Hazime Mizoguchi, Emi Tamaki, 2020年7月，DOI 10.1111/1440-1703.12156
- ・ 「生類憐みの令」の動物観（下），共著者：溝口元・高山晴子，「生物学史研究」，100号，17-29頁，2020年6月
- ・ 早稲田大学と生物学—教育学部理学科生物学専修設立に至る史的経緯—，共著者：溝口元・吉竹晋平・大山隆・花嶋ありな・加藤尚志・筒井和義・園池公毅・富永基樹・伊藤悦郎，「学術研究 自然科学編」（早稲田大学教育学部），第68号，1-26頁，2020年3月

報告（共著）

- ・ 行田市障がい者ネットワーク加盟団体職員及び立正大学社会福祉学部学生を対象とした障がい者の人権に関するアンケート調査報告，共著者：木村浩章・渡辺真一・関口正彦・吉村彰史・溝口元，「立正社会福祉研究」，22巻（通巻36号），95-112頁，2020年11月

エッセイ（単著）

- ・ オアシスあるいはシェルターとしての生物学史，「生物学史研究」，100号，121-124頁，2020年6月

送辞（単著）

- ・ 稲葉一洋先生をおくる，「人間の福祉」，第34号，1-2，2020年3月

追悼（単著）

- ・ 追悼 大山正先生 コロンビア大学グレーム教授への2通の書簡とともに，「心理学史・心理学論」，20・21巻，25-32頁，2020年5月

学会等発表（連名）

- ・ 日本近世前期の「子返し」—一角田藤左衛門萬事覚書に見られる事例の分析を通じて—，連名者：坂田英昭・溝口元，日本医学哲学倫理学会（オンライン），要旨：「抄録集」，6頁，2020年10月

▼2019（平成31・令和元）年

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・ 第12章 忠犬ハチ公と軍犬，『犬からみた人類史』（大石高典・近藤祉秋・池田光穂編），勉誠

出版 (全499頁), 278-299頁, 2019年 5 月

論文 (単著)

- ・第15代学長飯沼龍遠：台北帝国大学心理学教授から新制立正大学初代学長への途, 「立正大学史紀要」, 17-35頁, 2019年 3 月

論文 (共著)

- ・「生類憐みの令」の動物観 (上), 共著者：溝口元・高山晴子, 「生物学史研究」, 99号, 31-44頁, 2019年11月
- ・グリーフケアの実態と展望—医療・介護職員に対するアンケート結果を中心に—, 共著者：沼田真優・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 21巻 (通巻35号), 59-69頁, 2019年11月
- ・JR 武蔵野線における優先席, 共著者：山口小春・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 20巻 (通巻34号), 59-69頁, 2019年 3 月
- ・介護保険制度成立後の介護老人福祉施設における情報通信機器の導入と活用, 共著者：大門大志・大門真澄・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 20巻 (通巻34号), 71-82頁, 2019年 3 月

解説記事 (単著)

- ・⑮日本の植物の名づけ親—牧野富太郎, 17頁, ⑯光合成の材料, 18頁, ⑰顕微鏡と細胞の発見, 19頁, ⑱遺伝の規則性, 20頁, ⑲ワトソンとクリックの発見, 21頁, 『授業に活かす科学史26のエピソード』 (日本科学史学会編), 大日本図書, 2019年11月
- ・国立遺伝学研究所ゴールドシュミット文庫の特徴と意義, 「遺伝 生物の科学」, 73巻 6号, 528-531頁, 2019年11月
- ・坂西志保に戦前・占領期における日本の科学史研究への貢献, 「科学史研究」, 291号, 282-291頁, 2019年10月
- ・日本における黎明期の科学史研究と戦後の復興—本特集の趣旨, 「科学史研究」, 291号, 249-251頁, 2019年10月

資料 (共著)

- ・川崎市における精神障害者スポーツに対する地域支援機関の対応, 共著者：鈴木剛・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 20巻 (通巻34号), 83-87頁, 2019年 3 月

書評 (単著)

- ・「心の科学史」と「心理学史」, 高橋滯子著『心の科学史：西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』 (講談社学術文庫, 2016), 「こころの科学とエビステモロジー」 (電子ジャーナル), 創刊号, 42-44頁, 2019年 3 月

報告書 (編著)

- ・『日本における科学と社会の今日的課題の解決に寄与する関連領域を含む新たな科学史研究』 (課題番号：16K01169, 平成28～30年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C)一般) 研究成果報告書) (全354頁), 2019年 3 月

報告（単著）

- ・福祉は「性」とどう向き合うか あるいは、科学は「性」とどう向き合ってきたか
「立正大学社会福祉研究所年報」, 21号, 241-247頁, 2019年3月

学会等発表（単名）

- ・ナポリ臨海実験所における比較発生学と生物進化論, 日本動物学会第90回大阪大会, 要旨:
「プログラム集」, Kcon-Navi 1頁, 2019年9月
- ・日本の蝶研究史における図譜と新種記載, 日本科学史学会第66回年会・総会（岐阜）, 要旨:
「研究発表講演要旨集」, 27頁, 2019年5月

学会等発表（連名）

- ・行田市障がい者ネットワーク加盟団体職員及び立正大学社会福祉学部学生を対象とした障がい者の人権に関するアンケート調査結果報告, 連名者: 木村浩章・渡辺真一・関口正彦・吉村彰史・溝口元, 立正大学社会福祉学会第21回大会, 要旨:「発表要旨集」, 12頁, 2019年11月

招待講演（単名）

- ・戦後日本の生物学界・研究者と「生物科学」, 日本生物科学者協会講演会「生物科学の70年から日本の生物学を考える」（東京）, 2019年3月

▼2018（平成30）年

著書（共編著書, 担当部分単著）

- ・Chapter 2 Section 3 男女共同参画社会とワーク・ライフ・バランス（32-41頁）, Chapter 6 Section 3 家庭支援の展望（140-144頁）, あとがき, 『子ども家庭支援論』, アイ・ケイコーポレーション（全147頁）, 共編者: 溝口元・寺田清美, 2018年8月

著書（項目執筆, 担当部分単著）

- ・江戸時代の動物学－中国本草学からの脱却と独自性（30頁-33頁）, 明治以降の日本の動物学－お雇い外国人教師と大学制度（34-37頁）, 『動物学の百科事典』（日本動物学会編）, 丸善出版（全770頁）, 2018年9月

論文（単著）

- ・日本の大学理系学部における生物学教育と生物学史, 「生物科学」, 69巻3号, 130-139頁, 2018年6月
- ・坂西志保の戦前・戦時・占領期における日本の科学史研究への貢献, 「サジアトール」, 45号, 20-26頁, 2018年5月
- ・忠犬ハチ公, 軍用動物と戦時体制－動物文化史の視点から, 「科学史研究」, 285号, 49-57頁, 2018年4月

論文（共著）

- ・日本保育協会刊行の研究報告書における保育課題の変遷と解決の方策, 共著者: 溝口元・国

重俊亮, 「人間の福祉」, 第32号, 29-58頁, 2018年2月

追悼 (単著)

- ・ 早川進一氏の思い出, 「深谷郵趣」, 第407号, 50-51頁, 2018年10月
- ・ 追悼 長野敬先生一死生観・生物学史・民科生物部会一, 「生物科学」, 69巻3号, 192頁, 2018年6月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本動物学会の140年, 日本動物学会本部企画シンポジウム, 2018年12月 (東京), 要旨: 「プログラム集」, 21頁
- ・ 坂西志保の戦前・占領期における日本の科学史研究への貢献, シンポジウム: 日本における黎明期の科学史研究と戦後の復興, 日本科学史学会第65回年会・総会 (東京), 2018年5月, 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 121頁

学会等発表 (連名)

- ・ 日本の植物学者による欧米の専門雑誌掲載論文 (1884-1925), 連名者: 溝口元・高山晴子, 日本科学史学会第65回年会・総会 (東京), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 43頁, 2018年5月

招待講演 (単名)

- ・ パラダイムとアイデアあるいはアイデアと問題, 「生態学分野におけるアイデア共有の形を探る」, 日本生態学会集会 (大阪), 2018年10月

▼2017 (平成29) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 第7章19世紀科学思潮と元良勇次郎一心的エネルギー, 心元の背景一, 『元良勇次郎著作集 別巻2 元良勇次郎著作集解題』 (大山正監修, 大泉溥編集主幹), クレス出版 (全392頁), 161-185頁, 2017年12月

著書 (項目執筆, 担当部分単著)

- ・ 朝井勇宣 (9頁), アミノ酸 (19頁), 遺伝子 (41-42頁), 緒方章 (100頁), 酵素 (247-248頁), 佐々木隆興 (275頁), 志方益三 (292頁), 館勇 (405頁), タンパク質 (413-414頁), 日本化学史学会編『化学史事典』 (執筆者全181名), 化学同人 (全985頁), 2017年3月

著書 (翻刻, 担当部分共著)

- ・ 生存競争と品性陶冶との関係『教育界』 (1903) (308-317頁), 社会進化の目的について『丁酉倫理会講演集』 (1901) (340-345頁), 進化論と現今の日本 吉丸一昌編『名家 修養談叢』 (1903) (346-354頁), 科学と修養『丁酉倫理会講演集』 (1904) (470-480頁), 共著者: 溝口元・高山晴子, 『元良勇次郎著作集 第13巻 論文集』 (大山正監修 大泉溥編集主幹), クレス出版 (全355頁), 2017年1月

論文 (単著)

- ・ 傷痍軍人とリハビリテーションー温泉療法ならびに職業補導を中心にー, 「立正大学社会福祉

研究所年報」, 19号, 230-244頁, 2017年 3 月

- ・ 社会福祉学部におけるキー・コンピテンシーを念頭においた教養的科目「自然科学 I」の展開, 「立正社会福祉研究」, 18巻 (通巻32号), 9-19頁, 2017年 3 月

論文 (共著)

- ・ 欧米の専門誌に掲載された日本人研究者による生物学・地学領域の論文・記事 (1884-1926), 共著者: 高山晴子・溝口元, 「東海の科学史」, 12号, 97-110頁, 2017年 7 月

解説記事 (単著)

- ・ 被災記: リスクマネジメント, レジリエンスの向上を目指して, 「生物科学」, 69巻 1 号, 2017 年 8 月, 2-3 頁
- ・ 幼い命を守るために保育所ができる危機管理と防災・備災 (第 3 回), 「保育界」, 2017年 5 月号 (513号), 24-25頁, 2017年 5 月
- ・ 幼い命を守るために保育所ができる危機管理と防災・備災 (第 2 回), 「保育界」, 2017年 4 月号 (512号), 16-17頁, 2017年 4 月
- ・ 幼い命を守るために保育所ができる危機管理と防災・備災 (第 1 回), 「保育界」, 2017年 3 月号 (511号), 20-21頁, 2017年 3 月

報告書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 第25回国際科学史技術史会議 (リオ・デ・ジャネイロ: ICHST2017) 参加記, 「第25回国際科学史技術史会議 (於リオデジャネイロ) 報告集」 (日本学術会議史学委員会 IUHPST 分科会), 32-37頁, 2017年12月

国際学会等発表 (単名)

- ・ History and Future Prospects of the Study of History of Science and Technology in Japan, 25th International Congress of History of Science, Technology (Rio de Janeiro, Brazil), 要旨: *Book of Abstracts*, 82-83頁, 2017年 7 月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本の天然記念物選定と動物学者, 日本動物学会第88回大会 (富山), 要旨: 「プログラム集」, 65頁, 2017年 9 月
- ・ 動物学・植物学関係の日本理学史学会設立賛同者, 日本科学史学会第64回年会・総会 (高松), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 45頁, 2017年 6 月

講演 (単名)

- ・ ES 細胞, iPS 細胞, 再生医学の原理と課題, 日蓮宗ビハーラ・ネットワーク, 第13回心のちの講座, 「NVN ニュース」, 21号, 1-7頁, 2017年 3 月
- ・ 忠犬ハチ公, 軍用動物と戦時体制-動物文化史の観点から, 日本科学史学会第29期科学史学校 (日本大学理工学部), 2017年 2 月, 要旨: 「科学史通信」, 428号, 21頁, 2017年 1 月

▼2016 (平成28) 年

著書 (単著)

- ・『生命倫理と人間福祉』, アイ・ケイコーポレーション (全156頁), 2017年4月

論文 (単著)

- ・「傷痍軍人」考—大島渚監督「忘れられた皇軍」を通して—, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 18号, 53-63頁, 2016年3月
- ・米国大型助成財団の医療・福祉への眼差し—社会貢献から社会的責任へ—, 「人間の福祉」, 30号, 67-82頁, 2016年2月

論文 (共著)

- ・介護保険制度成立前後の特別養護老人ホームにおける情報通信機器の導入, 共著者: 大門大志・大門真澄・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 17巻1・2号 (通巻31号), 57-67頁, 2016年3月

報告 (単著)

- ・社会福祉学部におけるキー・コンピテンシーを念頭においた教養的科目の展開, 「Rissho University FD News Letter」, Vol.17, 3-4頁, 2016年11月

国際学会等発表 (単名)

- ・Origins of Japanese modern zoology : Forerunners of E. S. Morse (1838-1925), The 22nd International Congress of Zoology in Okinawa (Naha, Japan), 要旨: *Access & Venue Program Abstracts*, 453頁, 2016年11月

学会等発表 (単名)

- ・軍用犬, 使役犬, ハチ公からみた近代日本の動物観と動物学, 日本科学史学会第63回年会・総会 (東京), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 23頁, 2016年5月

新聞記事 (紹介)

- ・日蓮宗 溝口教授が講演 再生医療を学ぶ 「中外日報」2016年6月8日, 9面, 2016年6月

▼2015 (平成27) 年

著書 (共著)

- ・『自然科学のとびら—生命・宇宙・生活—』, 共著者: 溝口元・河合忍, アイ・ケイコーポレーション (全162頁), 2015年3月

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・映画『ハチ公物語』, 『南極物語』に見る日本人のイヌ観, 『東大ハチ公物語: 上野博士とハチ, そして人と犬とのつながり』 (一ノ瀬正樹, 正木春彦編), 東京大学出版会 (全230頁), 162-169頁, 2015年3月

著書 (翻刻, 担当部分単著)

- ・社会進化の目的について『経済世界』(1906) (121-127頁), 科学と哲学『明治学報』(1906)

(152-155頁), 哲学と科学の範囲『明治学報』(1907) (156-161頁), 娯楽的な学問『中学文壇』(1909) (162-165頁), 科学と道徳『丁酉倫理会倫理講演集』(1911) (243-251頁)『元良勇次郎著作集 第12巻 論稿 (1906-1912) 社会・哲学・倫理・宗教』(大山正監修, 大泉溥編集主幹), クレス出版 (全358頁), 2015年12月

著書 (翻刻, 共著)

- ・生存競争と品性陶冶との関係, 社会進化の目的について, 進化論と現今の日本, 共著者: 溝口元・高山晴子, 『元良勇次郎著作集 第9巻』(大山正監修, 大泉溥編集主幹), クレス出版 (全533頁), 2015年1月

論文 (単著)

- ・中村禎里先生の生物学専攻学生時代と立正大学における教員生活, 「生物学史研究」, 92号, 74-89頁, 2015年8月
- ・日本の昆虫学者による昆虫食への言及: 歴史的素描, 「生物科学」, 66巻3号, 141-150頁, 2015年6月

論文 (共著)

- ・重度知的障害者における集団支援活動の取り組みー「国立コロニーのぞみの園」における実践を中心にー, 共著者: 鈴木昭彦・溝口元, 「立正社会福祉研究」, 16巻2号 (通巻30号), 1-9頁, 2015年3月
- ・心理学から見た長谷川式簡易知能評価スケールの特徴: 長谷川和夫へのインタビューから, 共著者: 鈴木朋子・溝口元, 「横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ」, 17号, 11-27頁, 2015年2月

解説記事 (単著)

- ・名も実利も社会貢献もーノーベル賞の変容, 「生物科学」, 66巻2号, 65頁, 2015年3月

追悼 (単著)

- ・中学理科講師, 日本科学史学会事務, ペニシリン研究ー徳元琴代を偲ぶー, 「イル・サジアトーレ」, 42号, 81-84頁, 2015年5月

学会等発表 (単名)

- ・エビは魚, カニは亀だったー日本の甲殻類研究史, 日本動物学会第86回大会 (新潟), 要旨: 「講演要旨集」, 73頁, 2015年9月
- ・戦後の日本における生物学史関連書籍の特徴, 日本科学史学会第62回年会・総会 (大阪), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 99頁, 2015年5月

▼2014 (平成26) 年

著書 (項目執筆: 担当部分単著)

- ・心理学史の方法論, 『誠信 心理学辞典 新版』(執筆者合計341名), 誠信書房 (全1088頁), 27-29頁, 2014年9月

著書 (翻刻・共著)

- ・Ⅱ哲学・倫理学・宗教 1. 哲学・科学思想, 共著者: 溝口元・高山晴子, 『元良勇次郎著作集 第6巻 論考 (1890~1900) 社会(2)哲学・倫理・宗教』(大山正監修, 大泉溥編集主幹), クレス出版 (全398頁), 161~213頁, 2014年1月

論文 (単著)

- ・スミソニアン博物館学芸員スタイネガーによる日本産両生類調査とその現存液浸標本調査 (付) 台北帝国大学旧蔵青木文一郎採集ネズミ科剥製標本, 「生物学史研究」, 91号, 87-114頁, 2014年11月
- ・日本の大学における障害者スポーツ, アダプテッド・スポーツの現状, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 16号, 9-28頁, 2014年3月

論文 (共著)

- ・認知症の早期発見: 「長谷川式知能評価スケール」誕生の史的背景, 共著者: 溝口元・鈴木朋子, 「立正社会福祉研究」, 第16巻1号 (通巻29号), 21-30頁, 2014年9月

解説 (単著)

- ・食材偽装表示事件と「種」の認識, 「生物科学」, 65巻4号, 193頁, 2014年4月

報告書 (単著)

- ・『近代日本の動物「種」の認識過程とその天然記念物, 生物多様性研究への寄与』(課題番号: 23501210, 平成23~25年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書), 全156頁, 2014年3月

報告書 (担当部分単著)

- ・第24回国際科学史技術史医学史会議 (マンチェスター) 参加報告, 『第24回国際科学史・技術史・医学史会議報告 Knowledge at work』, 日本学術会議第一部史学委員会 IUHPS 分科会, 42-44頁, 2014年7月

報告書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・第3章 問題提起 関連他職種の事例を考慮した保育所の業務改善 (17-29頁), 第7章 保育所の業務改善に関する展望 (2) (154-162頁), 『保育所における業務改善に関する調査研究報告書』, 社会福祉法人日本保育協会 (全180頁), 2014年3月

書評 (単名)

- ・加藤克 『ブラキストン標本学』 北海道大学出版会, 「生物科学」, 66巻1号, 60頁, 2014年10月

学会等発表 (単名)

- ・戦前期における来日外国人動物学者が採集した日本産動物の標本学, 日本動物学会第85回大会 (仙台), 要旨: 「予稿集」165頁, 2014年9月
- ・日本における生物学史関連書籍の出版と大学における講義, 日本科学史学会61回年会・総会 (江別), 要旨: 「研究発表講演要旨集」72頁, 2014年5月

学会シンポジウム指定討論者（単名）

- ・元良勇次郎が日本の心理学に与えた貢献，日本心理学会第78回大会（京都），「プログラム」39頁，2014年9月

▼2013（平成25）年

著書（項目執筆，担当部分単著）

- ・地質学（348-349頁），発生学（427頁），分類学（477-478頁）『行動生物学辞典』（執筆者全328名），東京化学同人（全637頁），2013年11月
- ・グールド（Gould, Stephen Jay）：844頁，サルストン（Sulston John Edward）：1111頁『岩波世界人名大辞典』第1分冊（ア～テ），岩波書店（全1830頁），2013年12月
- ・ドーキンズ（Dawkins, Clinton Richard）：1866頁，ニコルソン（Nicholson, Alexander John）：1953頁，ハミルトン（Hamilton, William Donald）：2123頁，ヘニック（Henning, Emil Hans Willi）：2543-2544頁，ボーデンハイマー（Bodenheimer, Frederick Simon）：2652頁，メイナード・スミス（Maynard Smith, John）：2864頁，ヤング（Young, John Zachary）：2946頁，レマーク（Remarque, Erich Maria）：3287頁『岩波 世界人名大辞典』第2分冊（ト～ン），岩波書店（全1755頁），2013年12月

論文（単著）

- ・韓国におけるホスピス・緩和ケア病棟の現況，「成人病と生活習慣病」，43巻6号，668-674頁，2013年6月
- ・「アホウドリ」のネーミングとポリティカル・コレクトネス，「人間の福祉」，第27号，67-77頁，2013年3月
- ・ペット（愛玩）からコンパニオン（伴侶）へー動物導入による生きる喜びと供養での悲しみー，「立正大学社会福祉研究所年報」，第15号，78-88頁，2013年3月

論文（共著）

- ・統合失調症当事者に対する心理教育普及の障壁の特定，共著者：鎗田英樹・溝口元，「千葉作業療法」，第2巻1号，71-82頁，2013年3月

解説記事（単著）

- ・ペット（愛玩）からコンパニオン（伴侶）へー人間と動物の新たな関係，「NVN（日蓮宗ビハーラ・ネットワーク）ニュース」，15号，1-8頁，2013年3月

追悼（単著）

- ・追悼 磯野直秀先生ー動物学，科学論，博物誌史的御研究を振り返りながらー，「生物学史研究」，88号，95-112頁，2013年3月

報告（単著）

- ・第24回国際科学史技術史医学史会議（マンチェスター）参加記，「第24回国際科学史・技術史・医学史会議報告，日本学術会議第一部史学委員会 IUHPS 分科会」，42-44頁，2013年11月

- ・第24回国際科学史・技術史・医学史会議（マンチェスター）における優生学史，自然誌史関係の報告について，「生物学史研究」，89号，99-113頁，2013年10月

国際学会等発表（単名）

- ・日本における高齢者の自殺（自死）とその予防，韓日自殺予防シンポジウム，新羅大学校，要旨：「要旨集」52-54頁，2013年11月
- ・The influence on Japanese zoology of foreign zoologists who visited Japan before World War II, 24th International Congress of History of Science, Technology and Medicine (Manchester, United Kingdom), 要旨：Summary and Programme, 425頁，2013年9月

学会等発表（単名）

- ・大学における障がい者スポーツの現状，立正大学社会福祉学会第15回大会，要旨：「立正大学社会福祉学会第15回大会発表要旨集」，10頁，2013年11月
- ・台北帝国大学理農学部における日本人動物学者の活動，日本科学技術史学会第16回研究発表会・総会（東京），要旨：「プログラム」，13-14頁，2013年11月
- ・台北帝国大学旧蔵ネズミ科剥製標本，日本動物学会第84回大会（岡山），要旨：「予稿集」195頁，2013年9月
- ・スミソニアン博物館蔵スタイネガー採集日本産両生爬虫類液浸標本調査，日本科学史学会60周年会・総会（東京），要旨：「研究発表講演要旨集」，48頁，2013年5月
- ・ゴールドシュミット文庫：その実態と意義，国立遺伝学研究所 The 1649th Biological Symposium, 2013年3月21日，要旨：国立遺伝学研究所ホームページ (<https://www.nig.ac.jp/nig/ja/research/seminer-ja?list=old>)

▼2012（平成24）年

著書（分担執筆，担当分単著）

- ・問題51 心理学史におけるヒストリオグラフィの意義と方法は何か（122-123頁），第53話 心理学史における資金史の意義と方法は何か（126-127頁），人物コラム ダーウィン（78-79頁），『心理学史』（サトウタツヤ・鈴木朋子・荒川歩編著），学文堂（全164頁），2012年3月

論文（単著）

- ・精神保健福祉士国家試験における職業倫理関連問題，「人間の福祉」，26号，59-72頁，2012年1月

国際学会等発表（単名）

- ・Establishment of Experimental Embryology in Japan : A Historical Sketch, Asia-Pacific Developmental Biology Conference 2012 (Chinese Taipei), 要旨：Program Book, 144頁，2012年10月

国際学会等発表（連名）

- ・Japanese Psychology and Research Foundations in the US, XXX International Congress of

Psychology (Cape Town, South Africa), 連名者: Hajime Mizoguchi and Tomoko Suzuki,
要旨: *Abstracts*, 462頁, 2012年7月

- ・ The Development of the Binet-Simon Intelligence Test in Japan, XXX International Congress of Psychology (Cape Town, South Africa), 連名者: Tomoko Suzuki and Hajime Mizoguchi, 要旨: *Abstracts*, 462頁, 2012年7月

学会等発表 (単名)

- ・ 戦前の日本における滞在外国人動物学者の活動, 日本動物学会第83回大会 (大阪), 要旨: 「予稿集」, 157頁, 2012年9月
- ・ 国立遺伝学研究所蔵ゴールドシュミット文庫について, 日本科学史学会59回年会・総会 (津), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 45頁, 2013年5月

シンポジウム話題提供 (単名)

- ・ 1912年とこの100年の心理学の展開, 日本心理学会第76回大会 (東京), 要旨: 「大会発表論文集」, 979頁, 2012年9月

▼2011 (平成23) 年

著書 (共著)

- ・ 『生命と生活環境—自然科学への誘い—』, 共著者: 溝口元・河合忍, アイ・ケイコーポレーション (全138頁), 2011年10月

著書 (共編著)

- ・ 『家庭支援論』, 共編者: 溝口元・寺田清美, アイ・ケイコーポレーション (全144頁), 2011年6月

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 7章 IT 機器による障害者支援, 『[新通史] 日本の科学技術 世紀転換期の社会史 1995年～2011年 第4巻』 (吉岡斉編集代表), 原書房 (全642頁), 285-288頁, 2011年12月
- ・ コラム ゲノム解析の展開とセントラルドグマの変容 (281-284頁), コラム 感性工学の誕生と展開 (285-288頁) 『[新通史] 日本の科学技術 世紀転換期の社会史 1995年～2011年 第3巻』 (吉岡斉編集代表), 原書房 (全662頁), 2011年10月
- ・ 日本におけるダーウィンの受容と影響, 『ダーウィンの世界 ダーウィン生誕200年—その歴史的・現代的意義— 学術会議叢書 17』, 財団法人日本学術協力財団 (全212頁), 146-166頁, 2011年2月

論文 (単著)

- ・ アメリカ心理学史資料館における映像資料について, 「心理学史・心理学論」, 第12・13巻合併号, 29-35頁, 2011年9月
- ・ IT 機器による障害者支援の側面, 「人間の福祉」, 25号, 27-38頁, 2011年3月
- ・ アメリカ・ワシントン D.C. における医療・福祉に関連した協会・博物館, 「立正大学社会福

社研究所年報」, 13号, 1-15頁, 2011年 3 月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本におけるウニを中心とした棘皮動物研究史, 第 7 回棘皮動物研究集会 (平塚), 2010年12 月
- ・ 植民地朝鮮在住日本動物学者の活動, 日本科学技術史学会第14回研究発表会 (東京), 要旨: 「要旨集」, 7 頁, 2011年10月
- ・ 日本における棘皮動物研究史, 日本動物学会第82回大会 (旭川), 要旨: 「予稿集」, 131頁, 2011年 9 月

シンポジウム指定討論者

- ・ 明治期心理学者の活動とその意義—元良勇次郎の場合—, 日本心理学会第75回大会 (東京), 「プログラム」, 45頁, 2011年 9 月

▼2010 (平成22) 年

著書 (事典, 分担執筆)

- ・ 生命科学年表, 『生物の事典』 (石原勝敏・末光隆志編) (執筆者全62名), 朝倉書店 (全542 頁), 473-503頁, 2010年 9 月

論文 (単著)

- ・ 韓国のホスピス・緩和ケア病棟における医療と福祉, 「人間の福祉」, 24号, 13-25頁, 2010年 3 月

報告 (単著)

- ・ 第23回国際科学史技術史会議 (ブダペスト) における生物進化論関係報告について, 「生物学史研究」, 83号, 57-66頁, 2010年 3 月

解説記事 (単著)

- ・ 日本の女性動物学者—歴史的素描, 『社団法人日本動物学会 男女共同参画・女性研究者懇談会 10周年記念誌』, 12-20頁, 2010年 9 月
- ・ 日本におけるダーウィンの受容と影響, 「学術の動向」, 15巻 3 号, 48-57頁, 2010年 3 月

書評 (単著)

- ・ 編集委員が選んだ新入生に薦める100冊 生物学の歴史と方法, 「生物科学」, 62巻 1 号, 58 頁, 2010年 9 月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本におけるウニを中心とした棘皮動物研究史, 第 7 回棘皮動物研究集会 (平塚), 2010年12 月
- ・ スミソニアン博物館学芸員スタイネガーによる日本産両生・爬虫類調査と日本人動物学者, 日本動物学会第81回大会 (東京), 要旨: 「予稿集」, 117頁, 2010年 9 月

▼2009（平成21）年

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・第8章 ダーウィンは生物学者としてビーグル号に乗ったのだろうか？『科学の真理は永遠に不変なのだろうかーサプライズの科学史入門ー』，ベレ出版（全279頁），177-200頁，2009年8月

論文（単著）

- ・ブリティッシュ・コロンビア大学およびアクロン大学ソーシャルワーク学部の概要と地域パートナーシップ，「立正社会福祉研究」，11巻1号（通巻19号），11-20頁，2009年11月
- ・感性福祉と感性工学ーディシプリン形成を中心にー，「立正大学社会福祉研究所年報」，11号，25-42頁，2009年3月

報告（単著）

- ・さまざまなダーウィーンーダーウィーン生誕200年『種の起原』刊行150年を記念して，ダーウィーンの現在性を考える，「科学史研究」，251号，177-178頁，2009年9月
- ・野口英世の人生と医科学と日米社会ーひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ大学の研究室へー KAKENHIー，「人間の福祉」，23号，57-71頁，2009年3月

解説記事（単著）

- ・ウッズホール海洋生物学研究所の下村脩博士，「遺伝 生物の科学」，63巻3号，86-89頁，2009年5月

書評（単著）

- ・武田洋幸・相賀裕美子著『発生遺伝学 脊椎動物のからだと器官のなりたち』，「生物科学」，61巻1号，63頁，2009年12月
- ・本川達雄編『ウニ学』，「生物科学」，61巻1号，64頁，2009年12月

国際学会等発表（単名）

- ・History of National Institute of Genetics in Japan, XXIII International Congress of History of Science and Technology (Budapest, Hungary)，要旨：Book of Abstracts & List of Participants，504-505，2009年7月

学会等発表（単名）

- ・スタイネガー記載スミソニアン博物館蔵日本産ハ虫類の原図，日本動物学会第80回大会（静岡），要旨：「予稿集」，121頁，2009年9月
- ・国立遺伝学研究所の成立背景，日本科学史学会第56回年会（福岡），要旨：「研究発表講演要旨集」，58頁，2009年5月

学会等発表（連名）

- ・富士見産婦人科病院事件と医療倫理，連名者：飯塚美子・溝口元，第28回日本医学哲学・倫理学会大会（大津），要旨：「要旨集」，30頁，2009年10月

講演 (単名)

- ・ 日本におけるダーウィンの受容と影響, 日本学術会議主催 ダーウィン生誕200年—その歴史的・現代的意義—, 要旨:「講演要旨集」7頁, 2009年12月

新聞記事 (紹介)

- ・ 生命科学の進展とフィランソロピー 研究助成の歴史的 연구に科研費 中高生に成果伝えるプログラムも, 「立正大学学園新聞」, 第105号, 2009年4月

▼2008 (平成20) 年

論文 (単著)

- ・ 「感性」研究の新たな流れ—感性工学と感性福祉—, 「日本研究」(韓国外国語大学校日本研究所), 38輯, 7-28頁, 2008年12月
- ・ ヒトゲノム研究と生命倫理—福祉関連事項を中心に—, 「人間の福祉」, 22号, 33-43頁, 2008年3月
- ・ 国立遺伝学研究所の設立前後, 「共同利用機関の歴史とアーカイブス」, 2006/2007, 93-114頁, 2008年3月

解説記事 (単著)

- ・ 日本の生命科学の展開とロックフェラー財団, 「学術の動向」, 13巻5号, 89-94頁, 2008年5月

国際学会等発表 (連名)

- ・ Wundt and Stumpf collection in Japan, XXIX International Congress of Psychology (Berlin, Germany), 連名者: Miki Takasuna, Hajime Mizoguchi, 要旨: *Abstracts*, 162頁, 2008年7月

学会等発表 (単名)

- ・ ジョンズ・ホプキンス大学在学時の中瀬古六郎, 2008年度化学史研究発表会 (東京), 要旨: 「化学史研究」, 35巻2号, 114頁, 2008年7月

シンポジウム話題提供 (単名)

- ・ 古川竹二: 血液型気質相関説の光と影—東京女子高等師範学校・教育心理学・性格理論の歴史的検討—, 日本パーソナリティ心理学会第17回大会 (東京), 2008年11月

▼2007 (平成19) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 第2章 発生学・生理学, 『日本の動物学の歴史 シリーズ21世紀の動物科学 1』(社団法人日本動物学会監修), 培風館 (全236頁), 30-55頁, 2007年7月

論文 (単著)

- ・ Japanese Biologists at the Marine Biological Laboratory, Woods Hole, *Historia Scientiarum*,

17巻1号, 20-37頁, 2007年8月

- ・社会福祉士国家試験に出題された「生命倫理」関連問題, 「立正社会福祉研究」, 8巻2号(通巻14号), 33-42頁, 2007年3月

解説記事(単著)

- ・日本の生命科学の自立とナポリ, ウッズホール臨海実験所, 「学術の動向」, 12巻9号, 86-91頁, 2007年9月

学会等発表(単名)

- ・ウッズホール臨海実験所における神田左京, 日本科学史学会第54回年会(京都), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 97頁, 2007年5月

学会等発表(連名)

- ・ウニ卵の受精前後におけるCaspase-3の活性について, 連名者: 渡井恵理華・風間真・河合忍・溝口元・日野晶也, 日本動物学会第78回大会(弘前), 要旨: 「予稿集」, 30頁, 2007年9月

▼2006(平成18)年

著書(単著)

- ・『生命倫理と福祉社会』(全216頁), アイ・ケイ・コーポレーション, 2006年4月

著書(分担執筆, 担当部分単著)

- ・パブロフ学説と日本の心理学, 『心理学史の新しいかたち』(佐藤達哉編), 誠信書房(全228頁), 69-189頁, 2006年7月

論文(単著)

- ・日米研究助成財団と心理学—カーネギー財団, ロックフェラー財団, 斎藤報恩会の場合, 「心理学史・心理学論」, 7・8号, 1-14頁, 2006年10月
- ・ロックフェラー財団と公衆衛生院の設立, 「人間の福祉」, 19号, 25-38頁, 2006年3月
- ・生物学からみた母性と父性—マターナル・アフェクション, パターナル・アフェクションの科学的基盤, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 8号, 17-25頁, 2006年3月

論文(短報, 単著)

- ・戦前期における米国研究財団から助成を受けた日本人生物学者たち, 「科学史研究」, 238号, 120-122頁, 2006年9月

資料(単著)

- ・ナポリ, ウッズホール臨海実験所関連文献, 「生物学史研究」, 76号, 47-56頁, 2006年6月

学会等発表(単名)

- ・ロックフェラー財団派遣来日生物学者 A.S. パースの講義内容(1929), 日本科学史学会第53回年会(東京), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 86頁, 2006年5月

学会等発表 (連名)

- ・ウニ初期発生における Caspase-1 と Caspase-3 の活性について, 連名者: 渡井恵理華・風間真・河合忍・溝口元・日野晶也, 日本動物学会第77回大会 (松江), 要旨: *Zoological Science*, 23巻, 1181頁, 2006年9月

シンポジウム指定討論者 (単名)

- ・日本の心理学史に関わる海外資料収集調査研究－国立台湾大学心理系, 同図書館所蔵, 心理学実験機器, 資料から, 日本心理学会第70回大会 (福岡), 「プログラム」, 76頁

▼2005 (平成17) 年

著書 (共著)

- ・『改訂新版 生物学の歴史』, 共著者: 溝口元・松永俊男, 放送大学教育振興会 (全264頁), 2005年3月

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・社会福祉と生命倫理の交点－リプロダクティブ・ヘルス／ライツ問題との関連から, 『福祉文化の創造 福祉学の思想と現代的課題』 (立正大学社会福祉学部編), ミネルヴァ書房 (全338頁), 318-333頁, 2005年10月

論文 (単著)

- ・Reception of Pavlov's theory in Japan *Japanese, Psychological Research*, 47巻2号, 95-105頁, 2005年5月
- ・野口英世とウツズホール臨海実験所－カーネギー研究所による助成との関連から, 「生物学史研究」, 74号, 61-63頁, 2005年4月
- ・障害者スポーツの社会的浸透－新聞記事・記念切手を中心に－, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 7号, 53-67頁, 2005年3月
- ・障害者スポーツ概念とその史的展開, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 7号, 5-21頁, 2005年3月
- ・Penicillin Production and the Reconstruction of the Pharmaceutical Industry, *A Social History of Science and Technology in Contemporary Japan*, 2巻 (S. Nakayama ed.) Transpacific Press, Melbourne, 541-551頁, 2005年2月

論文 (共著)

- ・ロックフェラー財団における公衆衛生研究助成, 共著者: 溝口元・高山晴子, 「人間の福祉」, 17号, 91-108頁, 2005年3月
- ・障害者スポーツの社会的浸透－新聞記事・記念切手を中心に－, 共著者: 溝口元・角崎栄里子, 「立正大学社会福祉研究所年報」, 7号, 53-67頁, 2005年3月
- ・早稲田大学教育学部生物学教室安増研究室の研究活動, 共著者: 溝口元・並木英男, 「学術研究 生物学・地球科学編」, 53号, 27-35頁, 2005年2月

論文（短報）

・「条件反射説」の行動主義心理学への影響，「生物学史研究」，74号，105-107頁，2005年4月
国際学会等発表（単名）

・ Japanese Biologists who supported by the Research Grant from the American Research Foundation before World War II, XXII International Congress of History of Science (Beijing, China), 要旨： *Book of Abstracts*, 416頁，2005年7月

学会等発表（単名）

・ ロックフェラー財団アーカイブにおける戦前期の日本関係資料，日本科学史学会第52回年会，
要旨：「研究発表講演要旨集」，29頁，2005年6月

学会等発表（連名）

・ ウニ永久胞胚のアポトーシス，連名者：河合忍・中山麻衣子・藤原昭子・日野晶也，溝口元，日本動物学会第76回大会（筑波），要旨：*Zoological Science*，22巻，1468頁，2005年10月
・ ウニ後期原腸胚におけるアポトーシス，連名者：森博章・河合忍・溝口元・日野晶也，日本動物学会第76回大会（筑波），要旨：*Zoological Science*，22巻，1461頁，2005年10月

シンポジウム指定討論者（単名）

・「日本の心理学史に関わる海外資料収集調査研究」報告，日本心理学会第69回大会（東京），
「プログラム」：54頁

▼2004（平成16）年

論文（単著）

・ 動物園・水族館と動物学—その史的展開—，「生物科学」，55巻3号，171-180頁，2004年2月

報告書（分担執筆，担当部分単著）

・ 学会と学会史—『日本応用心理学会史』『日本心理学会75年史』刊行に寄せて，「心理学実験室開設（1903）以後における本邦心理学の展開」（研究代表者：佐藤達哉），平成13，14，15年度，科学研究費補助金（基盤研究B），課題番号（13410022）（全196頁），144-152頁，2004年3月

国際学会等発表（単著）

・ Japanese Biologists at the Marine Biological Laboratory, Woods Hole, History of Science Society, Philosophy of Science Association Joint Meeting (Austin, USA), 2004年11月

学会等発表（単名）

・ 戦前期日本の生命科学者に対するカーネギー財団の助成，日本科学史学会第51回年会，要旨：「研究発表講演要旨集」，23頁，2004年5月

学会等発表（連名）

・ アカウニ胚の初期発生における細胞数変化と CometAssay によるアポトーシスの検出，連名者：森博章・河合忍・藤原昭子・溝口元・日野晶也，日本動物学会第75回大会（神戸），要

旨: *Zoological Science*, 21巻, 1296頁, 2004年9月

▼2003 (平成15) 年

論文 (単著)

- ・『日本応用心理学会史』, 『日本心理学会75年史』刊行によせて, 「心理学史・心理学論」, 5巻, 69-72頁, 2003年12月
- ・水族館における動物介在療法－障害児・者と水生生物, 「人間の福祉」, 13号, 1-11頁, 2003年2月

報告書 (共著)

- ・後口動物胚における原腸形成のメカニズムの研究 (研究代表者: 竹内重夫), 「年報2002」(神奈川大学総合理学研究所), 85-87頁, 2003年3月

学会等発表 (単名)

- ・野口英世と米国研究財団, 科学史西日本研究大会, 2003年11月
- ・野口英世とウッズホール臨海実験所, 日本科学史学会第50回年会, 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 26頁, 2003年6月

学会等発表 (連名)

- ・ウニ胚細胞数の変化とアポトーシス, 連名者: 溝口元・藤原昭子・山本崇・河合忍・日野晶也, 日本動物学会第74回大会 (函館), 要旨: *Zoological Science*, 20巻, 1549頁, 2003年9月

▼2002 (平成14) 年

著書 (共著)

- ・『科学技術の歴史－人間社会の技術倫理をさぐる－』, 弘学出版 (全130頁), 共著者: 溝口元・中村邦光, 2002年3月

論文 (単著)

- ・パブロフ条件反射説の受容における日米比較－石川日出鶴丸, 佐武安太郎, 林蘅と W. ガントの場合, 「心理学史・心理学論」, 4巻, 21-28頁, 2002年11月
- ・臨海実験所と発生学－蜜月から乖離, そして新たな模索へ, 「生物科学」, 54巻1号, 40-50頁, 2002年7月
- ・ナボリ, ウッズホール臨海実験所と日本の発生学, 「生物学史研究」, 69号, 61-63頁, 2002年6月
- ・Bioethical Aspects of Gender Identity Disorder in Japan, *Human Well-Being*, No.10, 153-157頁, 2002年2月

書評 (単著)

- ・川上武編著『戦後日本病人史』(農文協, 2002年3月刊), 「科学史研究」, 41巻, 223号, 179-181頁, 2002年9月

学会等発表（単名）

- ・「色覚異常」研究の社会史，科学技術社会論学会第1回年次研究大会，要旨：「予稿集」，133頁，2002年11月

学会等発表（連名）

- ・ウニ胞胚，原腸胚期に見られるアポトーシス様細胞出現の2回のピーク，連名者：溝口元・河合忍・日野晶也，日本動物学会第73回大会（金沢），要旨：Zoological Science, 19巻，1450頁，2002年9月
- ・阿部文夫の優生学への熱意－外交史料館所蔵資料をもとに，連名者：サトウタツヤ・溝口元，日本科学史学会第49回年会，要旨：「研究発表講演要旨集」，85頁，2002年5月

▼2001（平成13）年

著書（共著）

- ・『新訂 生物学の歴史』，放送大学教育振興会（全222頁），共著者：溝口元・中村禎里，2001年3月

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・「変態心理」に見る大正期の生命科学，『『変態心理』と中村古峽』（小田晋・栗原彬・佐藤達哉・曾根博義・中村民男編），不二出版（全382頁），92-119頁，2001年1月

著書（訳書，共訳）

- ・『写真で読むアメリカ心理学のあゆみ』（John A. Popplestone & Marion White Mcpherson, An Illustrated History of American Psychology, The University of Akron Press, 1999の全訳，大山正監訳），共訳者：大山正・鈴木祐子・溝口元・高砂美樹・文野洋・西川泰夫・佐藤達哉・辻敬一郎，新曜社（全182頁），2001年4月

論文（単著）

- ・日本の西欧近代動物学の自立とジョンズ・ホプキンス大学在籍者，「生物学史研究」，68号，29-42頁，2001年12月
- ・林猷・W. ガント往復書簡－日米パブロフ門下の日本における初の邂逅，「心理学史・心理学論」，3巻，37-42頁，2001年11月
- ・The Population Program and the Birth Control Program during Occupation, *A Social History of Science and Technology in Contemporary Japan*, 1巻 (S. Nakayama ed.), Transpacific Press, Melbourne, 395-410頁，2001年10月
- ・GHQ's Public Health Policy : The Quarantine Program and Influence of DDT, *A Social History of Science and Technology in Contemporary Japan*, 1巻 (S. Nakayama ed.), Transpacific Press, Melbourne, 382-394頁，2001年10月
- ・ジョンズ・ホプキンス大学病院におけるパストラル・ケア・サービスについて，「人間の福祉」，10号，121-13頁，2001年9月

- ・ワシントン大学ソーシャルワーク学部の概要およびシアトル市におけるコミュニティサポートについて, 「立正社会福祉研究」, 2号, 103-112頁, 2001年3月

国際学会等発表 (単名)

- ・The Progress of Studies in the History of Biology in Japan, XXI International Congress of History of Science (Mexico City, Mexico), 要旨: *Book of Abstracts*, 305-306頁, 2001年7月

国際学会等発表 (連名)

- ・Detection of apoptosis-like cells of sea urchin embryo at the blastula and gastrula stage, 14th International Congress of Developmental Biology (Kyoto, Japan), 連名者: Hazime Mizoguchi, Shinobu Kawai, Akiya Hino 要旨: *Program and Abstracts* S1-P41, 2001年7月

学会等発表 (単名)

- ・日本の西欧近代動物学の自立とジョンズ・ホプキンス大学在籍者, 日本科学史学会第48回年会, 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 23頁, 2002年5月

学会等発表 (連名)

- ・ウニ原腸胚の細胞数とアポトーシス, 連名者: 溝口元・河合忍・日野晶也, 日本動物学会第72回大会 (福岡), 要旨: *Zoological Science*, 18巻, 80頁, 2001年10月

解説記事 (単著)

- ・ウッズホール臨海実験所における日本人研究者の活動, 「生物科学ニュース」, 353号, 16-20頁, 2001年5月

▼2000 (平成12) 年

著書 (共著, 担当部分単著)

- ・動物療法—新たな「癒し」の一形態, 『仏教と環境 立正大学仏教学部開設50周年記念論文集』 (立正大学仏教学部編), 丸善 (全517頁), 157-173頁, 2000年3月

論文 (単著)

- ・「近代心理学」か「現代心理学」か—日本における心理学研究体制のルーツ問題—, 「心理学史・心理学論」, 2巻, 37-42頁, 2000年10月
- ・生物学上初のウニ発生学書の著者 E.B. ハーヴィ, 「生物学史研究」, 66号, 29-42頁, 2000年10月
- ・「色覚異常」問題の社会史, 「人間の福祉」, 7号, 87-100頁, 2000年2月

解説記事 (単著)

- ・ナポリ臨海実験所と日本人(2), 「うみうし通信」, 26号, 5-7頁, 2000年3月

国際学会等発表 (連名)

- ・Yuzero Matora, as the first Japanese Psychologist, 連名者: Tatsuya Sato, Hazime Mizoguchi, Yasuo Nishikawa, Miki Takasuna, XXVII International Congress of Psychology (Stock-

holm, Sweden), 要旨: *International Journal of Psychology*, 35巻3.4号, 21602.04, 2000年7月

- ・ Studying abroad in Europe and the United States: Influences on Japanese psychology 1868-1945, 連名者: Miki Takasuna, Hazime Mizoguchi, Yasuo Nishikawa, Tatsuya Sato, XXVII International Congress of Psychology, Stockholm, Sweden, 要旨: *International Journal of Psychology*, 35巻3.4号, 31626.11, 2000年7月
- ・ Predecessors brought modern psychology as an experimental science in Japan, 連名者: Yasuo Nishikawa, Hazime Mizoguchi, Tadasu Oyama, Tatsuya Sato, Miki Takasuna, XXVII International Congress of Psychology (Stockholm, Sweden), 要旨: *International Journal of Psychology*, 35巻3.4号, 31626.12, 2000年7月

学会等発表 (連名)

- ・ アポトーシス阻害剤処理によるウニ初期胚の形態形成, 日本動物学会第71回大会 (東京) 要旨: *Zoological Science*, 17巻 85頁, 連名者: 溝口元・河合忍・日野晶也, 2000年9月

▼1999 (平成11) 年

著書 (単著)

- ・ 『生命の倫理－科学と福祉の交点』 弘学出版 (全192頁), 1999年4月

著書 (共編著)

- ・ 『ナボリ臨海実験所 去来した日本の科学者たち』 (中埜栄三・溝口元・横田幸雄編), 東海大学出版会 (全252頁), 1999年7月

著書 (共著, 担当部分単著)

- ・ バイオテクノロジー産業の展開 (507-520頁), 福祉機器の開発と展開 (989-1005頁), 『通史 日本の科学技術5 [国際期] 1980-1995』 (中山茂・後藤邦夫・吉岡斉責任編集), 学陽書房 (全1084頁), 1999年3月

論文 (単著)

- ・ 動物学者箕作佳吉, 谷津直秀の滞米在学記録について, 「生物学史研究」, 64号, 65-75頁, 1999年10月
- ・ 心理学史のヒストリオグラフィー—アクロン大学心理学歴史資料館蔵書を通じて—, 「心理学史・心理学論」, 創刊号, 9-18頁, 1999年9月
- ・ Cell numbers in the gut of sea urchin, *Hemicentrotus pulcherrimus*, *Zoological Science*, 16巻2号, 341-344頁, 1999年4月
- ・ 出生前診断と生命倫理, 「人間の福祉」, 5号, 249-260頁, 1999年2月

書評 (単著)

- ・ ベルナル・セイトル著, 塚田隆訳 『エイズ研究の歴史』 (文庫クセジュ, 白水社, 1998年5月刊), 「科学史研究」, 209号, 58-59頁, 1999年3月

解説記事 (単著)

- ・ナポリ臨海実験所と日本人(1), 「うみうし通信」, 25号, 9-11頁, 1999年12月

国際学会等発表 (連名)

- ・ Distribution of apoptosis-like cells in sea urchin early embryogenesis, 連名者: Hazime Mizoguchi, Dai Kudo, Keiko Hirota, Shinobu kawai, Akiya Hino, The International Symposium on Fertilization and Development of Sea Urchin and Marine Invertebrates, (Tokyo, Japan), *Program, Abstracts, Participant's List*, 35頁, 1999年12月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本心理学の制度化と福来友吉の排除, 日本超心理学学会第32回大会 (東京) 要旨: 「発表論文集」, 20頁, 1999年12月
- ・ 大正期の日本の性科学, 日本科学史学会生物学史分科会月例会 (東京), 要旨: 「生物学史研究」, 64号, 113頁, 1999年4月

学会等発表 (連名)

- ・ ウニ初期胚のアポトーシス様細胞の分布, 連名者: 溝口元・清水由美・広田啓子・河合忍・日野晶也, 日本動物学会第70回大会 (山形), 要旨: *Zoological Science*, 16巻, 59頁, 1999年9月

学会等発表 (指定討論者)

- ・ 日本の心理学史の展開: 明治・大正期における海外心理学の受容と導入, 日本心理学会第63回大会 (名古屋), 要旨: 「プログラム」, 62頁, 1999年9月

▼1998 (平成10) 年

論文 (単著)

- ・ The sponge in the history of Japanese Biology, *Sponge Sciences Multidisciplinary Perspectives* (Y.Watanabe and N.Fusetani eds.), Springer-Verlag, 427-439頁, 1998年1月
- ・ 性同一性障害と生命倫理, 「人間の福祉」, 3号, 57-71頁, 1999年2月
- ・ Japanese Biologists at the Naples Zoological Station, 1887-1956, *Historia Scientiarum*, 8巻2号, 99-113頁, 1998年12月

国際学会等発表 (単名)

- ・ Bioethical Aspects on Gender Identity Disorder in Japan, 4th World Congress of Bioethics, (Tokyo, Japan), 1998年11月

学会等発表 (単名)

- ・ 性転換手術と優生 (母体) 保護法, 日本科学史学会生物学史分科会月例会 (東京), 1998年4月

学会等発表 (連名)

- ・ ウニ胚原腸形成期に検出されたアポトーシス様細胞, 日本動物学会第69回大会 (広島), 連名

- 者：工藤大・溝口元・日野昌也，要旨：*Zoological Science*, 15巻 *Suppl.* 85頁，1998年9月
- ・ノルエピネフリン処理によるウニ胚の形態形成異常－細胞培養系を用いた骨片形成の解析，日本動物学会第69回大会（広島），連名者：岡野華奈・北嶋隆・溝口元・日野昌也，要旨：*Zoological Science*, 15巻 *Suppl.* 63頁，1998年9月

▼1997（平成9）年

著書（共編著）

- ・『通史 日本の心理学』（佐藤達哉・溝口元編著），北大路書房（全650頁），1997年11月

著書（共著，担当部分単著）

- ・性格研究の源流をさかのぼる，『多重人格とは何か』，朝日新聞社（全288頁），189-202頁，1997年1月

論文（単著）

- ・ナポリ臨海実験所における日本人研究者の活動，「生物科学」，49巻2号，107-116頁，1997年10月
- ・ウニ胚の原腸形成とコラーゲン合成－IV. アスコルビン酸， α -ケトグルタル酸投与による永久胞胚処理胚の原腸形成－，「立正大学短期大学部紀要」，39号，77-86頁，1997年7月
- ・ナポリ臨海実験所所蔵の日本関係資料について，「立正大学短期大学部紀要」，38号，13-26頁，1997年3月
- ・福祉機器の開発とテクノエイド論，「人間の福祉」，創刊号，77-97頁，1997年3月

書評（単著）

- ・常石敬一『七三一部隊生物兵器犯罪の事実』，「科学史研究」，204号，119-120頁，1997年12月

学会等発表（単名）

- ・ナポリ臨海実験所所蔵の日本人研究者に関する資料について，日本科学史学会生物学史分科会総会シンポジウム，要旨：「生物学史研究」，61号，35頁，1997年12月

学会等発表（連名）

- ・カルシウムイオノフォアの継続処理によるウニ胚の原基形成異常，日本動物学会第68回大会（奈良），連名者：岡野華奈・溝口元・日野昌也，要旨：*Zoological Science*, 14巻 *Suppl.* 76頁，1997年9月
- ・A23187処理による形態異常ウニ胚の生成，日本動物学会第68回大会（奈良），連名者：藤原昭子・鎌田康之・川本学・日野昌也・溝口元・安増郁夫，要旨：*Zoological Science*, 14巻 *Suppl.* 76頁，1997年9月

▼1996（平成8）年

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・長井長義，『日本科学者伝 地球人ライブラリー』，小学館（全320頁），10-16頁，1996年1月

論文 (単著)

- ・ 日本における実験生物学の成立と実験生物・実験方法, 「立正大学短期大学部紀要」, 37号, 29-39頁, 1996年 9 月
- ・ 昭和天皇の生物学研究と戦後復興, 「現代思想」, 24巻 6 号, 213-224頁, 1996年 5 月
- ・ 性格・精神疾患研究のヒストリーとタクソノミー, 「現代思想」, 24巻 2 号, 142-152頁, 1996 年 2 月

論文 (共著)

- ・ 日本の心理学史研究の現状とその意義, 共著者: 鈴木祐子・星野真由美・太田恵子・尾身康博・坂元章・佐藤達哉・溝口元, 「心理学評論」, 38巻 3 号, 396-423頁, 1996年 4 月

報告書 (単著)

- ・ 「実験生物・手法のデータベース化を通じた日本における実験生物学成立についての研究」 (研究代表者: 溝口元), 平成 6, 7 年度, 科学研究費補助金 (一般研究 C) 課題番号 (06680075) (全37頁), 1996年 3 月

国際学会等発表 (単名)

- ・ Immunocytochemical Studies on the Cell Proliferation of Freshwater Sponge during Development, International Conference on Sponge Science Biwako 1996 (Otsu, Japan), 要旨: *Abstract Volume*, 47頁, 1996年 3 月
- ・ Sponges in the History of Japanese Biology, International Conference on Sponge Science Biwako 1996 (Otsu, Japan), 要旨: *Abstract Volume*, 47頁, 1996年 3 月

学会等発表 (単名)

- ・ 日本における実験生物学の成立と実験生物, 日本科学史学会第43回年会 (徳島), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 76頁, 1996年 5 月

▼1995 (平成 7) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ カール・ラントシュタイナー (66-69頁), フレデリック・バンディング (162-165頁), 木原均 (166-169頁), 『テクノ時代の創造者 二十世紀の千人 5』, (朝日新聞社編), 朝日新聞社 (全440頁), 1995年 8 月
- ・ 4 - 10 ペニシリンと製薬工業の戦後復興, 『通史 日本の科学技術 2 〔自立期〕 1952-1959』 (中山茂・後藤邦夫・吉岡斉責任編集), 学陽書房 (全486頁), 373-381頁, 1995年 6 月
- ・ 3 - 4 公衆衛生政策ー引揚検疫と DDTー (251-259頁), 3 - 5 占領期における人口政策と受胎調整 (家族計画) (260-268頁), 『通史 日本の科学技術 1 〔占領期〕 1945-1952』 (中山茂・後藤邦夫・吉岡斉責任編集), 学陽書房 (全388頁), 1995年 6 月
- ・ クローンマウス カール・イルメンゼー (7-17頁), がん遺伝子発見 ドミニク・ステーリン (105-115頁), エイズウイルス発見 ロバート・ギャロ (259-270頁), 『科学史の事件簿』 (科

学朝日編), 朝日新聞社 (全282頁), 1995年1月

論文 (単著)

- ・生殖医療技術と生命倫理, 「立正大学短期大学部紀要」, 34号, 11-19頁, 1995年1月

報告 (共著)

- ・大学設置基準の「大綱化」に伴う影響調査とフォーラム報告, 「科学史研究」, 192号, 共著者: 河村豊・小林雅夫・佐野正博・橋本毅彦・溝口元・山崎正勝, 234-238頁, 1995年1月

学会等発表 (単名)

- ・孵化以降のウニ永久胞胚処理杯の細胞増殖, 日本動物学会第66回大会 (東京), 要旨: *Zoological Science*, 12巻 *Suppl.* 74頁, 1995年9月

解説記事 (単著)

- ・第46回 MIMOS 会議, 「細胞」, 27巻1号, 30-32頁, 1995年1月

解説記事 (共著)

- ・ダーウインをめぐる7つの謎, 「科学朝日」, 55巻7号, 共著者: 松永俊男・新妻昭夫・溝口元, 10-33頁, 1995年6月

▼1994 (平成6) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・「DDT 革命」－GHQ の公衆衛生政策, 『戦後科学技術の社会史』 (中山茂・吉岡斉編), 朝日新聞社 (全366頁), 32-35頁, 1994年9月
- ・Effect of 5-bromodeoxyuridine and aminopterin on cell proliferation and morphogenesis after gemule hatching of the freshwater sponge *Ephydatia fluviatilis*, *Sponges in Time and Space* (van Soest, van Kempen and Braekman eds.) Balkema, 1994年2月, 377-383頁
- ・人の世の姿－科学と社会, 『禅と生命科学』 (盛永宗興編), 紀伊国屋書店 (全334頁), 193-211頁, 1994年2月

論文 (単著)

- ・「血液型人間学」の情報発信源, 「現代のエスプリ」, 324号, 95-105頁, 1994年7月
- ・昭和初頭の「血液型気質相関説」論争－古川学説の凋落過程－, 「現代のエスプリ」, 324号, 67-76頁, 1994年7月

学会等発表 (単名)

- ・ウニ胚の原腸伸長時の細胞増殖, 日本動物学会第65回大会 (名古屋), 要旨: *Zoological Science*, 11巻 *Suppl.* 82頁, 1994年10月

学会等発表 (連名)

- ・ビーグル号来日神話について, 連名者: 松永俊男・溝口元, 日本科学史学会第41回年会 (京都), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 24頁, 1994年5月

解説記事 (単著)

- ・ 科学者像の変遷, 「科学朝日」, 54巻 1 号, 14-16頁, 1994年 1 月

▼1993 (平成 5) 年

著書 (共著)

- ・ 『地球・物質・生命』, 開成出版 (全192頁), 共著者: 森山茂・溝口元, 1993年 3 月

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 第 1 章 ヒトの誕生『生物としての人間 地球環境セミナー 6』(木本忠昭編), オーム社 (全 176頁), 1-16頁担当, 1993年 5 月

論文 (単著)

- ・ 外国における‘血液型とパーソナリティの関係’をめぐる研究, 「科学史研究」, 187号, 152-156頁, 1993年 9 月

報告書 (分担執筆, 担当分単著)

- ・ 日本の生物学界における進化論の受容, 『進化論受容の比較科学史的研究 (研究代表者: 鈴木善次), 平成 2, 3, 4 年度, 科学研究費補助金 (総合研究 A) 課題番号 (02301102)』 (全134 頁), 42-50頁, 1993年 3 月

報告書 (共著)

- ・ オセアニア地区英語研修主体海外研修実地調査, 「立正大学短期大学部紀要」, 32号, 共著者: 鷺尾祐喜義・溝口元・各務丈信, 111-123頁, 1993年 6 月

解説記事 (単著)

- ・ 頭のいい子は遺伝子で決まっている, 「科学朝日」, 53巻 9 号, 18-21頁, 1993年 9 月

国際学会等発表 (単名)

- ・ Effect of 5-bromodeoxyuridine and Aminopterin on Cell Proliferation and Morphogenesis of Freshwater Sponge, *Ephydatia fluviatilis*. 4th International Profera Conference (Amsterdam, The Netherlands), 1993年 4 月

学会等発表 (単名)

- ・ ABO 式以外の血液型と性格との関連をめぐって, 日本性格心理学会第 2 回大会 (川越), 要旨: 大会発表論文集, 7頁, 1993年 9 月
- ・ 「植物学雑誌」, 「動物学雑誌」にみる進化論の受容, 日本科学史学会第40回年会 (平塚), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 16頁, 1993年 5 月

学会等発表 (連名)

- ・ カワカイメンの鞭毛室形成と関連した発芽後の細胞増殖, 連名者: 溝口元・渡辺洋子・日本動物学会第64回大会 (那覇), 要旨: *Zoological Science*, 10巻 Suppl.55頁, 1993年11月
- ・ カワカイメンの単離原始細胞集団の再構成過程における細胞の増殖と分化, 連名者: 山下まや・溝口元・渡辺洋子, 日本動物学会第64回大会 (那覇), 要旨: *Zoological Science*, 10巻

Suppl. 55頁, 1993年11月

▼1992（平成4）年

著書（共著）

- ・『サイエンスを再演するーパート2ー』（フォーラム STS 編），北樹出版（全160頁），共著者：鬼頭秀一・小林傳司・下坂英・杉山滋郎・中島秀人・溝口元・八耳俊文，1992年7月

論文

- ・「血液型人間学」の展開と社会への浸透をめぐって，「立正大学短期大学部紀要」，31号，183-199頁，1992年12月
- ・「血液型人間学」の分析ーその特徴と科学的根拠をめぐって，「生物学史研究」，56号，25-36頁，1992年10月
- ・バイオテクノロジーにおける史的展開ーインターフェロンとモノクローナル抗体を中心として，「立正大学短期大学部紀要」，30号，91-108頁，1992年6月

報告（共著）

- ・米国西海岸社会福祉研修報告，「立正大学短期大学部紀要」，31号，共著者：原田壽子・稲葉一洋・溝口元，219-238頁，1992年12月

解説記事（単著）

- ・ドミニク・ステーリン，「科学朝日」，52巻10号，103-107頁，1992年10月
- ・カール・イルメンゼー 疑惑にかすんだクローンマウスの“父”，「科学朝日」，52巻1号，97-101頁，1992年1月

学会等発表（単名）

- ・Eysenck における血液型とパーソナリティの関係日本性格心理学会第1回大会（東京）要旨：「プログラム」，3頁，1992年11月
- ・ウニ胞胚における分裂期細胞の局在，日本動物学会第63回大会（仙台），要旨：Zoological Science，9巻，1158頁，1992年10月

▼1991（平成3）年

著書（共著）

- ・『生物の科学』，関東出版社（全122頁），共著者：溝口元・松原洋子，新妻昭夫，1991年1月

論文

- ・新聞報道にみる昭和天皇と生物学研究ー文献紹介を中心としてー，「立正大学短期大学部紀要」，28号，127-137頁，1991年6月
- ・GHQ 文書による占領期日本の医療衛生政策ーDDT 散布，ペニシリン生産，優生保護法の成立を中心として(1)ー，「立正大学短期大学部紀要」，27号，93-105頁，1991年3月

報告 (共著)

- ・ハワイ社会福祉研修報告, 「立正大学短期大学部紀要」, 29号, 共著者: 長尾章象・原田壽子・山口雅功・稲葉一洋・矢澤圭介・三友量順・溝口元・鷺尾祐喜義, 197-231頁, 1991年12月

解説記事 (単著)

- ・ギャロ博士, 依然譲らず エイズウイルス発見論争「決着」のてんまつ, 「科学朝日」, 51巻8号, 36-38頁, 1991年8月

学会等発表 (単名)

- ・孵化以降にアフィディコリンを投与したウニ胚の細胞増殖, 日本動物学会第62回大会 (岡山), 要旨: *Zoological Science*, 8巻, 1008頁, 1991年10月
- ・新聞記事にみる昭和天皇の生物学研究, 日本科学史学会第38年会 (筑波), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 27頁, 1991年6月

▼1990 (平成2) 年

論文 (単著)

- ・智能・学業成績と血液型気質相関説, 「生物学史研究」, 52号, 33-42頁, 1990年3月

論文 (共著)

- ・Collagen synthesis in Ephydatia fluviatilis during its development, Hazime Mizoguchi, Yoko Watanabe, *New Perspectives in Sponge Biology* (K.Rutzler, ed.), Smithsonian Institution Press. 188-192頁, 1990年12月

報告書 (分担執筆)

- ・ウニ胚の原腸形成における細胞間相互作用と形質発現に関する研究, (研究代表者: 安増郁夫), 昭和61, 62, 63年度, 科学研究費補助金 (総合研究A) 課題番号 (61304009) (全426頁), 1990年6月

学会等発表 (単名)

- ・動物極化あるいは植物極化処理したウニ胚の細胞増殖, 日本動物学会第61回大会 (新潟) 要旨: *Zoological Science*, 7巻, 1109頁, 1990年10月

▼1989 (昭和64・平成元) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・血液型気質相関説 古川竹二 (61-72頁), ニワトリの雌雄鑑別法 増井清 (116-126頁), 若返り療法 榎保三郎 (170-180), 医学博士号授与疑義事件 勝矢信司 (266-276頁), 『スキャンダルの科学史』 (「科学朝日」編), 朝日新聞社 (全302頁), 1989年10月

論文 (単著)

- ・ウニ胚の原腸形成とコラーゲン合成—Ⅲ. α , α' -ジピリジル投与による外原腸形成の阻害—, 「立正大学短期大学部紀要」, 25号, 51-59頁, 1989年9月

論文（共著）

- ・ Synthesis of collgan-like protein in embryonic organs of the sea urchin, *Hemicentrotus pulcherrimus*, Hazime Mizoguchi, Akiko Fujiwara, Ikuo Yasumasu, *Development Growth and Differentiation*, 31巻2号, 189-196頁, 1989年4月

書評（単著）

- ・ 磯野直秀『三崎臨海実験所を去来した人たち』, 「科学史研究」, 170号, 119-120頁, 1989年7月

解説記事（単著）

- ・ ヒナの雌雄鑑別法とユニークな着想, 「財界展望」, 33巻4号, 38-45頁, 1989年3月

学会等発表（単名）

- ・ 長崎医大医学博士売買事件（1933）をめぐって, 日本科学史学会第36回年会（大阪）, 要旨：「研究発表講演要旨集」, 19頁, 1989年5月

学会等発表（連名）

- ・ ウニ胚の原腸形成と関連した胞胚植物半球の細胞増殖, 日本動物学会第60回大会（京都）要旨： *Zoological Science*, 6巻, 1155頁, 連名者：溝口元, 田中省二, 1989年10月

▼1988（昭和63）年

著書（共著）

- ・ 『生物科学』, 培風館（全218頁）, 共著者：加藤秀生, 溝口元, 1988年4月

論文（単著）

- ・ ウニ胚の原腸形成とコラーゲン合成－Ⅱ．アスコルビン酸, α -ケトグルタル酸投与による外原腸形成－, 「立正大学短期大学部紀要」, 23号, 111-120頁, 1988年9月

書評（単著）

- ・ 鬼頭秀一, 小林傳司, 下坂英, 杉山滋郎, 中島秀人『サイエンスを再演する』, 「科学史研究」, 163号, 177-178頁, 1988年1月

解説記事（単著）

- ・ 榎保三郎 若返り療法事件, 「科学朝日」, 48巻5号, 83-87頁, 1988年5月

学会等発表（単名）

- ・ 榎保三郎とスタイナハ（若返り療法）論争, 日本科学史学会第35回年会（札幌）, 要旨：「研究発表講演要旨集」, 36頁, 1988年6月

学会等発表（連名）

- ・ ウニ胚の原腸形成に関与する胞胚期の細胞周期, 日本動物学会第59回大会（富山）, 要旨： *Zoological Science*, 5巻, 1256頁, 連名者：溝口元, 田中省二, 1988年10月

▼1987 (昭和62) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 第3部第1章コラーゲン, 『発生システムと細胞行動』 (MIMOS 会議編), 125-142頁, 培風館 (全200頁), 1987年6月
- ・ 荣誉はどちらに帰すべきか H. マンゴルト, 『ノーベル賞の光と陰 (増補版)』 (科学朝日編), 229-241頁担当, 朝日新聞社 (全258頁), 1987年1月

論文 (単著)

- ・ 軍隊と血液型気質相関説, 「生物学史研究」, 49号, 19-28頁, 1987年9月

解説記事 (単著)

- ・ 増井清 雌雄鑑別法と男女産み分け論争, 「科学朝日」, 47巻12号, 62-66頁, 1987年12月
- ・ 古川竹二 「血液型人間学」事始め, 「科学朝日」, 47巻7号, 62-67頁, 1987年7月

学会等発表 (単名)

- ・ SDS-PAGE によるウニ胚解離溶液におけるコラーゲン検出の試み, 日本動物学会第58回大会 (富山), 要旨: *Zoological Science*, 4巻, 1048頁, 1987年10月
- ・ 昭和初頭の雌雄鑑別法と男女自由妊娠法, 日本科学史学会生物学史分科会夏の学校 (東京) 要旨: 「生物学史研究」, 51号, 22-23頁, 1987年8月

▼1986 (昭和61) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・ 8. 社会における遺伝学, 『遺伝学の歩みと現代生物学』 (中村禎里編), 153-179頁, 培風館 (全184頁), 1986年6月

論文

- ・ ウニの異常胚形成－形態形成機構の解析, 「ラボラトリーアニマル」, 3巻4号, 56-60頁, 1986年7月
- ・ ウニ胞胚形態形成機構の解析－特にタンパク質分解酵素処理による胞胚形状の変化について一, 「立正大学短期大学部紀要」, 18号, 200-207頁, 1986年3月
- ・ 古川竹二と血液型気質相関説－学説の登場とその社会的受容を中心として一, 「生物科学」, 38巻1号, 9-12頁, 1986年2月

学会等発表 (単名)

- ・ 昭和初頭の血液型気質相関説論争, 日本科学史学会第33回年会 (名古屋), 要旨: 「研究発表講演要旨集」, 31頁, 1986年5月

学会等発表 (連名)

- ・ ウニ胚原腸形成期の細胞増殖, 日本動物学会第57回大会 (東京), 要旨: *Zoological Science*, 3巻, 1055頁, 連名者: 溝口元, 田中省二, 安増郁夫, 1986年10月

▼1985（昭和60）年

著書（単著）

- ・『科学の歴史—近代科学の成立と展開—』，関東出版社（全240頁），1985年1月

論文（単著）

- ・ウニ胚の原腸形成とコラーゲン合成—I．コラーゲン合成阻害剤投与による原腸形成の阻害一，「立正大学短期大学部紀要」，17号，85-112頁，1985年9月

国際学会等発表（単名）

- ・Collagen Synthesis in a Freshwater Sponge, *Ephydatia fluviatilis*, during the Course of Development, Third International Conference of the Biology of Sponge (Woods Hole, USA) 1985年11月

書評（単著）

- ・A.Fisher ed. *Space and Terrestrial Biotechnology*, 「生物科学ニュース」，162号，9頁，1985年5月

学会等発表（単名）

- ・古川竹二と血液型気質相関説，日本科学史学会生物学史分科会夏の学校（東京）要旨：生物学史研究，46号，46-47頁，1985年8月
- ・明治・大正期における発生学と胎生学，日本科学史学会第31回年会（京都），要旨：「研究発表講演要旨集」，28頁，1985年6月

学会等発表（連名）

- ・ウニ胚原腸の細胞数，日本動物学会第56回大会（東京），要旨：Zoological Science，2巻，946頁，連名者：溝口元，安増郁夫，1985年10月
- ・カワカイメンの発生過程におけるコラーゲン合成および芽球の発芽，形態形成に対するコラーゲンの役割，日本発生生物学会第18回大会（名古屋），要旨：Development Growth & Differentiation，27巻，509頁，連名者：溝口元，渡辺洋子，安増郁夫，1985年5月

▼1984（昭和59）年

著書（訳書，共訳）

- ・『19世紀の巨人＝医師・政治家・人類学者 ウィルヒョウの生涯』（Erwin H. Ackerknecht, Rudolf Virchow : Doctor Stateman Anthropologist, University of Wisconsin Press, 1953の全訳），サイエンス社（全336頁），共訳者：館野之男，村上陽一郎，河本英夫，溝口元，1984年3月

論文（共著）

- ・我国において刊行された発生学書について（Ⅱ）—発生学書の特徴および傾向—，「生物科学」，36巻4号，溝口元，磯合敦，196-199頁，1984年12月
- ・我国において刊行された発生学書について（Ⅰ）—発生学関係図書リスト—，「生物科学」，

36巻3号, 溝口元, 磯合敦, 149-153頁, 1984年8月

学会等発表 (連名)

- ・ウニの胚内器官におけるコラーゲン合成, 日本動物学会第55回大会 (盛岡), 要旨: *Zoological Science*, 1巻, 溝口元, 安増郁夫, 943頁, 1984年9月
- ・ウニ胚におけるポリ (ADP-リボース) 合成と3-アミノベンザミドが形態形成に及ぼす影響, 日本発生生物学会第17回大会 (熊本), 要旨: *Development Growth & Differentiation*, 26巻, 磯合敦, 溝口元, 安増郁夫, 375頁, 1984年5月

▼1983 (昭和58) 年

著書 (分担執筆, 担当部分単著)

- ・第11章 分子レベルでの生命研究, 『20世紀自然科学史 7 生物学 下』, (中村禎里編), 200-220頁, 三省堂 (全400頁), 1983年1月

論文 (単著)

- ・Collagen synthesized in sea urchin embryos during gastrulation is predominantly found in the archenteron, 「立正大学短期大学部紀要」, 13号, 1-5頁, 1983年12月
- ・大日本文明協会刊行の自然科学書について, 「科学史研究」, 146号, 99-106頁, 1983年7月
- ・大日本文明協会における科学啓蒙活動, 『創立百周年記念入選論文集』 (早稲田大学学生部), 135-163頁, 1983年2月

論文 (共著)

- ・Degeneration of archenteron in sea urchin embryos caused by α , α' -dipyridyl, *Differentiation*, 25巻, 106-112頁, 共著者: Hazime Mizoguchi, Akiko Fujiwara, Ikuo Yasumasu, 1983年12月
- ・Inhibition of archenteron formation by the inhibitors of prolylhydroxylase in sea urchin embryos, *Cell Differentiation*, 12巻, 225-231頁, 共著者: Hazime Mizoguchi, Ikuo Yasumasu, 1983年3月
- ・Effect of α , α' -dipyridyl on exogut formation in vegetalized embryos of the sea urchin, *Development Growth and Differentiation*, 25巻1号, 57-64頁, 共著者: Hazime Mizoguchi, Ikuo Yasumasu, 1983年3月

学会等発表 (連名)

- ・ウニ胚発生において合成されたコラーゲンの局在について, 日本動物学会第54回大会 (松山), 連名者: 溝口元, 安増郁夫, 要旨: 「動物学雑誌」92巻, 478頁, 1983年12月
- ・ α , α' -ジピリジル投与によるウニ胚原腸の崩壊過程, 日本発生生物学会第16回大会 (松山), 連名者: 溝口元, 藤原昭子, 安増郁夫, 1983年5月, 要旨: *Development Growth and Differentiation*, 25巻, 418頁

▼1982（昭和57）年

著書（分担執筆，担当部分単著）

- ・第4章 分化と形態形成，『20世紀自然科学史 6 生物学 上』（中村禎里編），123-171頁，三省堂（全314頁），1982年4月

論文（共著）

- ・ Exogut formation by the treatment of sea urchin embryos with ascorbate and α -ketoglutarate, *Development Growth and Differentiation*, 24巻4号, 359-368頁, 共著者: Hazime Mizoguchi, Ikuo Yasumasu, 1982年10月
- ・ Archenteron formation induced by ascorbate and α -ketoglutarate in sea urchin embryos kept in SO_4 free artificial seawater, *Developmental Biology*, 93巻, 119-125頁, 共著者: Hazime Mizoguchi, Ikuo Yasumasu, 1982年9月

学会等発表（単名）

- ・ 発生学（embryology）から発生生物学（developmental biology）へ，日本科学史学会生物学史分科会，要旨；「生物学史研究」，41号，40頁，1982年8月

学会等発表（連名）

- ・ α , α' -ジピリジル投与によるウニ胚外原腸の阻害，日本動物学会第53回大会（大阪），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，91巻，405頁，1982年11月
- ・ プロトコラーゲン水酸化阻害剤によるウニ胚原腸形成の阻害，日本発生生物学会第15回大会（東京），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；*Development Growth & Differentiation*, 24巻, 412頁，1982年5月

▼1981（昭和56）年

論文（単著）

- ・ T.H.Huxley の生物教育論，「生物科学」，33巻4号，218-223頁，1981年11月
- ・ アメリカ発生学成立の一側面—「細胞系統」研究を中心に—，「生物学史研究」，38号，11-21頁，1981年6月

学会等発表（単名）

- ・ 現代発生学と細胞説，日本科学史学会第26回年会（前橋），要旨；「研究発表講演要旨集」，19頁，1981年5月
- ・ トマス・ハックスレーの生物教育論，日本生物教育学会31回大会（東京），要旨；「生物教育」，21巻4号，25-26頁，1981年2月

学会等発表（連名）

- ・ アスコルビン酸， α -ケトグルタル酸投与によるウニ永久胞胚処理胚の原腸形成，日本動物学会第52回大会（札幌），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，90巻，445頁，1981年12月

- ・PDF 阻害物質による永久胞胚化とアスコルビン酸、 α -ケトグルタル酸による原腸胚形成，日本動物学会第52回大会（札幌），連名者：光永敬子，溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，90巻，444頁，1981年12月

▼1980（昭和55）年

書評（単著）

- ・アンセイヤー著，深町真理子訳『ロザリンド・フランクリンとDNA』，「科学史研究」，135号，177-178頁，1980年10月
- ・J. ハワード・J. リフキン著，磯野直秀訳『遺伝工学の時代』，「科学史研究」，135号，178-179頁，1980年10月

学会等発表（連名）

- ・ウニ原腸形成の阻害とコラーゲン合成，日本動物学会第51回大会（静岡），溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，89巻，397頁，1980年12月
- ・高等学校理科教育における科学史教材の開発(1)－高校生・大学生にみられる「科学」への理解度，1980日本科学教育学会年会，連名者：鈴木善次，加藤信行，田中賢二，溝口元，三輪寛治，要旨；「年会論文集」，139-140頁，1980年4月

▼1979（昭和54）年

論文（単著）

- ・「再生」から「再集合」へ－その概念変換の主要因－，「生物学史研究」，36号，1-13頁，1979年9月

学会等発表（連名）

- ・タンパク質分解酵素処理によるウニ胚外原腸形成の阻害，日本動物学会第50回大会（東京），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，88巻，413頁，1979年12月

▼1978（昭和53）年

学会等発表（単名）

- ・T. H. Huxley の科学講演における生物学観，日本科学史学会第26年会（東京），要旨；「研究発表講演予稿集」，21頁，1978年6月

学会等発表（連名）

- ・ウニ胚細胞間および細胞表面物質（細胞外物質）の分解と胞胚形状との関係，日本動物学会第49回大会（熊本），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，87巻，315頁，1978年12月

▼1977（昭和52）年

学会等発表（連名）

- ・プロナーゼ、ヒアルロニダーゼ処理によるウニ胞胚壁の厚さの変化，第48回日本動物学会（山形），連名者：溝口元，沢田和夫，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，86巻，291頁，1977年10月

シンポジウム発表（単名）

- ・生物学史のための共同作業，日本科学史学会生物学史分科会総会シンポジウム，要旨：「生物学史研究」，32号，44頁-45頁，1977年10月

▼1976（昭和51）年

学会等発表（連名）

- ・ウニ胚解離細胞の形，第47回日本動物学会（広島），連名者：溝口元，安増郁夫，要旨；「動物学雑誌」，85巻，331頁，1976年12月